

令和3年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」  
沖縄・動物系分野における有機的高専連携プログラム開発・実証事業

# 事業報告書

---

令和4年3月

学校法人 KBC学園

専修学校 沖縄ペットワールド専門学校

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として  
学校法人KBC学園 専修学校 沖縄ペットワールド専門学校が実施した  
令和3年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果を  
とりまとめたものです。

# 目次

第 1 部	事業の概要	
1	事業の実施体制	1
2	各機関の役割・協力体制	
2.1	高等学校	2
2.2	行政機関	2
2.3	専門学校	3
2.4	企業	3
3	事業の趣旨・目的等	
3.1	事業の趣旨	4
3.2	学習ターゲット、目指すべき人物像	4
3.3	当該教育プログラムが必要な背景について	5
3.3.1	沖縄県の高校の現状と新たな展望	5
3.3.2	動物系分野の現状と課題	7
4	開発する教育プログラムの概要	
4.1	内容	9
4.2	開発するプログラム全体図	11
4.3	高専連携接続の課題と解決方法	11
5	各年度の取り組み	
5.1	令和 3 年度	12
5.2	令和 4 年度	12
5.3	令和 5 年度	13
5.4	令和 6 年度	13
5.5	令和 7 年度	14
5.6	令和 8 年度	14
5.7	カリキュラム開発スケジュール	15
5.8	実証授業スケジュール	15
6	事業実施に伴うアウトプット（成果物）	16
7	目指すべき指標（令和 8 年度・最終年度目標）	17
8	本事業終了後※の成果の活用方針・手法	18

第2部	令和3年度の活動	
1	令和3年度スケジュール	20
2	連携プログラム開発協議会	
	2.1 連携プログラム開発協議会の設置	21
	2.2 連携プログラム開発協議会の構成員（委員）	22
3	事業を進めるにあたっての調査	
	3.1 高専連携プログラム開発のための ヒアリング調査概要	23
	3.2 高大連携プログラム先行事例視察調査	24
4	本事業の方向性協議	25
5	ヒアリング調査結果	
	5.1 観光系大学ヒアリング	28
	5.2 東京都教育庁ヒアリング	30
	5.3 東京都立町田工業高校ヒアリング	32
	5.4 沖縄県立中部農林高等学校	33
6	ヒアリング調査結果の検討	34
7	令和4年度開発プログラム方針の検討	35

## 図 目次

第 1 部	
図 1-1 事業の実施体制図	1
図 2-1 各機関の役割と協力体制図	2
図 3-1 沖縄県立高校の進学率	5
図 3-2 動物看護師の仕事の魅力	8
図 4-1 プログラム概要	9
図 4-2 プログラムと課題解決方法	10
図 4-3 プログラム全体図	11
図 4-4 高専連携接続の課題と解決方法図	11
図 8-1 本事業終了後の成果の活用方針・手法	19

## 表 目次

第 1 部	
表 5-1 カリキュラム開発スケジュール	15
表 5-2 実証授業スケジュール	15
表 6-1 事業実施に伴うアウトプット	16
表 7-1 目指すべき指標	17
第 2 部	
表 1-1 令和 3 年度スケジュール	20
表 2-1 連携プログラム開発協議会	21
表 2-2 連携プログラム開発協議会委員	22
表 3-1 事業を進めるにあたっての調査	23
表 3-2 高大連携プログラム先行事例調査	24
表 5-1 ヒアリング調査	28

## 資 料

観光系大学ヒアリング調査録	39
東京都教育庁ヒアリング調査録	42
東京都立町田工業高等学校ヒアリング調査録	45
沖縄県立具志川商業高等学校ヒアリング調査録	47

## 議事録

第1回プログラム検討委員会 議事録	52
第2回プログラム検討委員会 議事録	59





## 第1部 事業の概要

### 1 事業の実施体制

行政機関、高等学校、企業、専門学校四者によるコンソーシアムを構築。「連携プログラム開発協議会」を設立し、高・専一貫プログラムの計画を立案する。

計画を基に開発プログラム実証授業を開催し、プログラムの検証評価委員会によってプログラムの評価を行う。検証結果を基に新たな計画に反映させ実証授業を行う。このPDCAサイクルを有機的に機能させ、実効性・教育効果の高い連携プログラムを開発する。

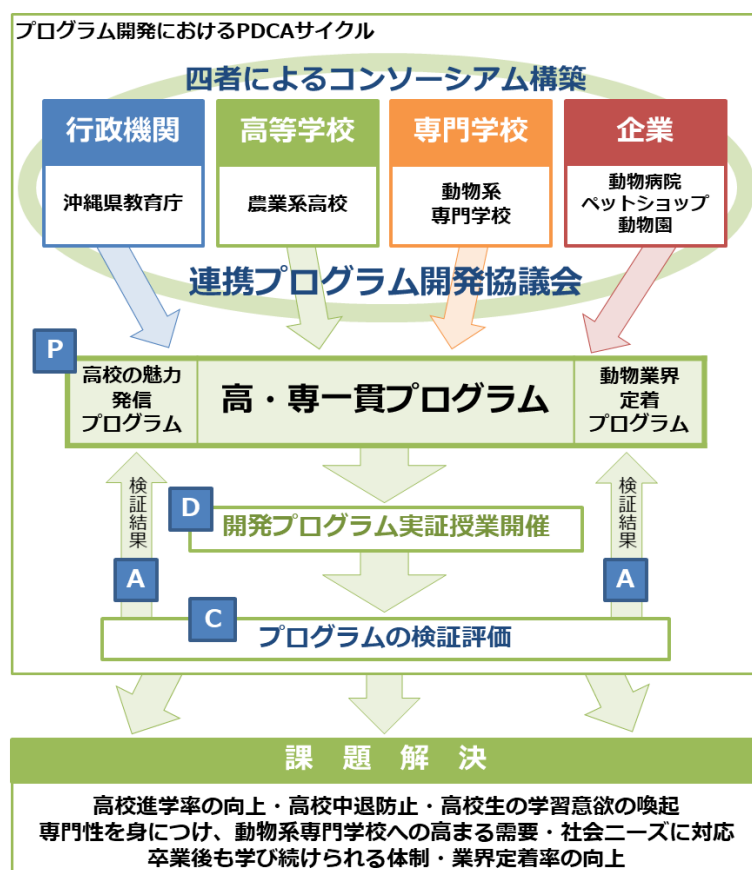


図 1-1 事業の実施体制図

## 2 各機関の役割・協力体制

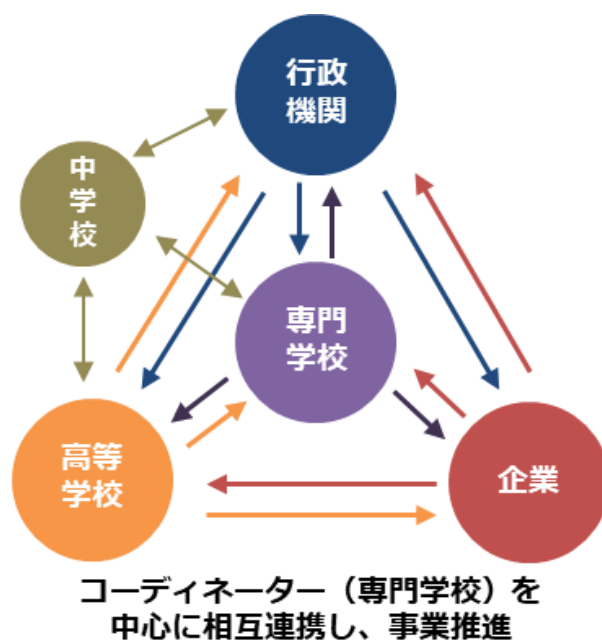


図 2-1 各機関の役割と協力体制図

### 2.1 高等学校

- 高等学校の課題やニーズ踏まえカリキュラムへ提言
- カリキュラム作成
- 高等学校に進学する中学生への広報周知、募集活動
- 学習指導要領とのすり合わせ

### 2.2 行政機関

- 地域課題、ニーズ踏まえカリキュラムへ提言
- 高等学校での単位認定の検討、方向性明示
- 県内中学校へ連携強化

## 2.3 専門学校

- コーディネーター業務
  - ・高等学校、行政、企業との橋渡し
  - ・全体調整、進捗管理、体制構築
  - ・連携プログラム開発協議会の運営
  - ・連携校、連携企業の開拓
  - ・開発プログラム普及活動
- カリキュラム作成、教材開発
- プログラム受講の高校生への学費減免検討
- 高校生の実習受け入れ
- 高等学校と企業との仲介

## 2.4 企業

- 業界の課題やニーズを踏まえカリキュラムへ提言
- 高校生、専門学校生の実習受け入れ
- 職業人講話講師

### 3 事業の趣旨・目的等

#### 3.1 事業の趣旨

高校生の「学習意欲を喚起し、能力を最大限に伸長すること」、動物系専門学校の「高まる需要・社会ニーズに対応するために専門性を高めること」そして、地域課題である「高校への進学率向上」や「高校中退防止」、さらに業界課題である専門学校卒業後の「動物業界への定着率向上」等多様な課題を解決するためのプログラムを開発する。開発プログラムは「高校生」「専門学校生」はもちろん、高校と専門学校の前後に位置する「中学生」及び「専門学校卒業後の社会人」も包括する。

時系列に見ると、中学と高校の橋渡しとして「高校の魅力発信プログラム」を開発。開発プログラムにより中学生にとっても魅力的な高校となり、高校進学率の向上、高校中退防止に繋げる。次に、高校と専門学校の5年間で学ぶ「高・専一貫プログラム」を開発。共通目標と一貫したカリキュラムを構築し、動物系分野の高まる需要や社会ニーズに対応できる専門人材を育成する。そして、専門学校卒業後も学び続けられる体制づくりとして「動物業界定着プログラム」を開発。離職を減らし、動物業界への定着率を向上する。卒業生が業界で活躍し、地域の中核人材となることは地域経済活性化の先導となる。また、高・専一貫プログラムで学ぶ高校生と専門学校生にとって卒業生は身近な将来像であり、将来像の明確化は共通の目標設定や一貫したカリキュラム構築の重要な要素となる。

開発プログラムにより「動物にかかわりながら、専門性を身につけ、人や社会への貢献を認識しつつ、収入が安定し、一生続けられる仕事として動物業界で活躍できる」という好循環を本プログラム通して実現していく。そして、我が国の労働生産性及び生涯を通じた学習機会の拡大に寄与する。

#### 3.2 学習ターゲット、目指すべき人物像

学習ターゲット：高校生、専門学校生

動物にかかわりながら、専門性を身につけ、人や社会への貢献を認識しつつ、収入が安定し、一生続けられる仕事として動物業界で活躍できる人材を育成する。

### 3.3 当該教育プログラムが必要な背景について

#### 3.3.1 沖縄県の高校の現状と新たな展望

##### ◆全国の高校生の現状と課題

文部科学省「新時代に対応した高等学校教育の在り方（令和2年7月17日）」より高校生の学習意欲に目を向けると、全体的な傾向として、学校生活への満足度や学習意欲は中学校段階に比べて低下している。高校においては、初等中等教育段階最後の教育機関として、生徒一人一人の特性に応じた多様な可能性を伸ばすとともに、高等教育機関や実社会との接続機能を果たすことが求められていることから、高校における教育活動を、高校生を中心に据えることを改めて確認し、その学習意欲を喚起し、能力を最大限に伸長するためのものへと転換することが急務である、としている。

##### ◆沖縄県の高校生の現状と課題

内閣府「沖縄の子供達を取り巻く現状」より、沖縄県の高校進学率は97.3%で全国順位は低いほうから1位、高校中退率は2.2%で全国順位は高いほうから1位、沖縄県の大学等進学率は39.6%で全国順位は低いほうから1位となっている。なお、沖縄県の子どもの相対的貧困率は29.9%で、全国平均の約2.2倍にのぼり、1人当たり県民所得は全国最下位、母子世帯の割合は2.6%と全国で最も高い。

一方、沖縄県の専修学校進学に目を向けると、沖縄県の専修学校進学率は24.1%で全国順位は高いほうから2位となっている。

指標	沖縄	全国	沖縄の順位
高校進学率 (%)	97.3	98.8	低いほうから1位
大学等進学率 (%)	39.6	54.7	低いほうから1位
専修学校進学率 (%)	24.1	16.4	高いほうから2位
高校中退率 (%)	2.2	1.4	高いほうから1位

図 3-1 沖縄県立高校の進学率

令和3年春卒業の沖縄県立高校の進学率は令和2年12月末時点で65.1%となっており、前年同時期(62.0%)を上回った。就職希望者が減り、専門学校等への進学希望者が増えたためである。沖縄県の金城教育長によると令和2年6月と12月の進路希望調査の比較では、就職希望の生徒が減少し、専門学校等への希望者が例年と比べ増加が顕著で、国の高等教育の就学支援制度やコロナ禍の影響があるのではないかと考えている、と述べた。(「沖縄タイムス」令和3年2月27日記事より)

#### ◆高専連携プログラム開発の必要性

沖縄県は従来より専修学校への進学率が高いうえに、専修学校への進学希望者が増えている今、高校生の学習意欲を喚起し、能力を最大限に伸長する高専連携プログラムを「高校」「専門学校」「企業」「行政」が有機的に連携し、プログラム開発することは、沖縄県の高校進学率の向上、高校中退防止のために必要不可欠である。とりわけ、本事業で我々「専門学校」が「高校」と「企業」をつなぐ仲介者としての役割を担うことで、高校生に学びの目的意欲を持たせ、将来像の明確化を促し、地域の中核人材へと成長することを後押ししていく。そして、開発プログラムにより沖縄県の子どもの貧困率低下、そして県民所得増加という地域課題解決に寄与したい。

#### ◆業界定着率の向上

我々は高専連携プログラムで学び、卒業した学生の当該分野での業界定着率を最重要プロセス目標値とする。そのため開発プログラムは企業・業界が就職した卒業生を引き続き育成支援できる体系にしていく。卒業生が業界で活躍し、地域の中核人材となることは地域経済活性化の先導となる。また、高校生、専門学校生にとって卒業生は身近な将来像でもあり、将来像の明確化は共通の目標設定や高専で一貫したカリキュラム構築の重要な要素となる。

### 3.3.2 動物系分野の現状と課題

#### ◆動物系分野への高まる需要やニーズ

コロナ禍が長引く中、自宅での生活に癒しを求め、家族の一員としてペットを飼う人が増えている。一般社団法人「ペットフード協会」によると、2020年に新たに飼われた犬と猫は、どちらも前年より6万匹以上増加、犬の新規飼育者飼育頭数は46万2千頭（前年比114%増）、猫の新規飼育者飼育頭数は48万3千頭（前年比116%増）となっている。また、近年では人と動物の関係が人に与える影響の重要性が認識され、動物を介在した介護や福祉、疾病治療や機能回復、教育に関する諸活動も行われるようになり、単なる愛玩動物としての飼養に留まらず、社会的意義も増している。

飼い主による健康管理やしつけの重要性、獣医療内容の高度化や多様化を背景に、「愛玩動物看護師」国家資格が誕生し、令和5年12月末までに第1回国家試験が実施されることとなっている。動物系専門学校では高まる需要や求められるニーズに対応すべく、さらなる教育内容を充実させているところである。

#### ◆動物系業界の現状と課題

一般社団法人日本動物看護職協会は今後の動物看護師のあり方や課題を検討するため、「動物看護師の勤務実態に関するアンケート調査」を2020年7月に実施した。調査結果によると、年収が「200万円未満」と回答した人が327人（26.3%）と最も多く、ついで「200～240万円未満」が285人（23.0%）であり、約半数が年収240万円未満で週40時間以上の勤務をしている状況であった。給与に対して、半数以上の676人（54.4%）が「不満」「非常に不満」と感じている結果となり、「満足」「ある程度満足」と回答した565人（45.5%）を上回っている。

また、就業規則の有無の問いに対して、「無い」の回答が220人（17.7%）、退職金についての問いでは「わからない」の回答が441人（35.5%）、労災保険の加入も「わからない」が287人（23.1%）であった。低賃金に対する不満や就業の不安定さはあるものの、「今後も動物看護師として働きたいと思う」と回答した人は971人（78.8%）と多く、仕事へのやりがいについても「非常に感じる」「ある程度感じる」の回答が1073人（86.5%）となった。

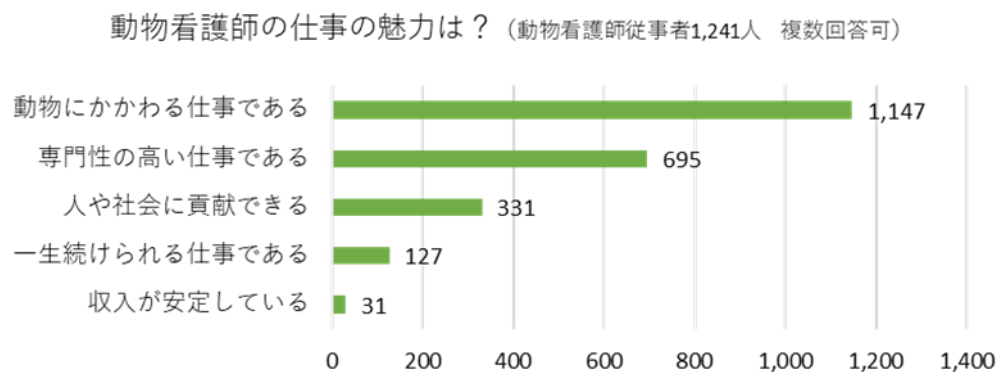


図 3-2 動物看護師の仕事の魅力

#### ◆動物系分野における高専連携プログラム開発の必要性

当学園の動物系専門学校卒業生も仕事へのやりがいを感じつつも、動物業界とは違った業種職種へ転職する者がいる。動物系分野への高まる需要と社会ニーズ、そして、地域の中核人材育成のために動物業界・企業も積極的に参入いただき、高専連携プログラムを開発する必要がある。

高校生及び専門学校生が「動物に関われること」はもちろん、「専門性」を身につけ、「人や社会への貢献」を認識し、「収入が安定し、長く続けられる動物関連の仕事」に就けるという好循環を本プログラム通じて実現していく。そして、我が国の労働生産性向上及び生涯を通じた学習機会の拡大に寄与する。

## 4 開発する教育プログラムの概要

### 4.1 内容

◆高校、専門学校の前後に位置する「中学」「卒業後」を含めた総合プログラムを開発

高校生の「学習意欲の喚起」や専門学校生の「高まる需要・社会ニーズへの対応」「専門性を高めること」と同時に、「高校進学率の向上」や「高校中退防止」、卒業後の「業界定着率の向上」と幅広い課題解決のために、本事業で開発するプログラムは高校、専門学校の前後である「中学」「卒業後」を包括した総合プログラムとする。

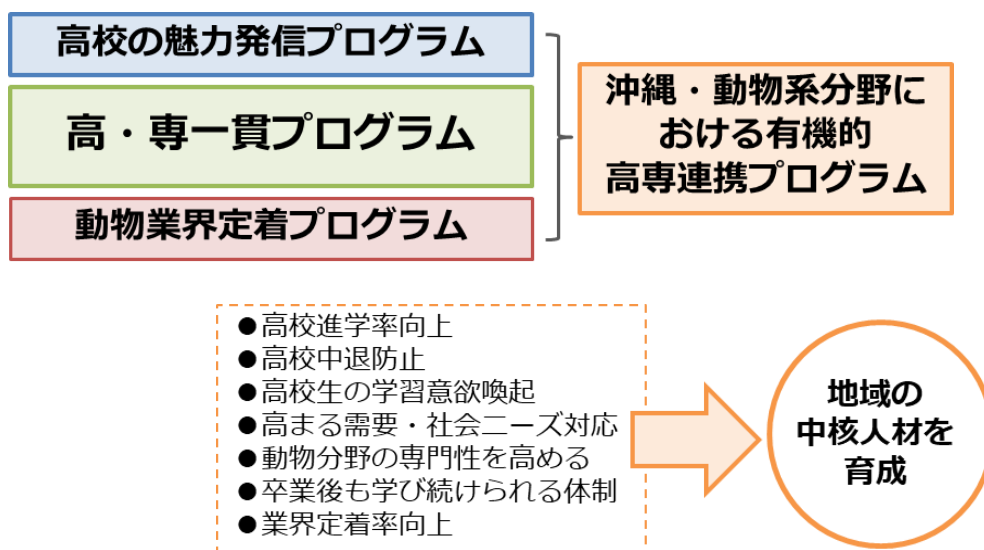


図 4-1 プログラム概要

## ◆問題意識を持ち、解決法を考え、実践できる人材を育成

プログラム名	解決課題	対象	解決方法 ※詳細は次頁
高校の魅力発信プログラム	高校進学率の向上	中学校 高校	高校が中学校で農業・動物関連高校の魅力を伝え、専門高校への進学者を増やす
高・専一貫プログラム	高校中退防止	高校	アニマルプロフェッショナルに触れ、将来像を明確化する
	高校生の学習意欲の喚起	高校	基礎的实践を通し、飼養に慣れ、成功体験を重ねる
	専門性を身につける	高校 専門学校	高校3年次から準備を始め、資格取得を推進する
	動物系専門学校への高まる需要・社会ニーズに対応	専門学校	地域社会に貢献できるフィールドワークを実施する
動物業界定着プログラム	卒業後も学び続けられる体制	専門学校 企業	専門学校と企業が連携し、卒業後も学び続けられる体制強化
	業界定着率の向上	企業	働きやすい職場づくり支援、卒業後も専門学校で気軽に相談できる体制づくり

図 4-2 プログラムと課題解決方法

### 4.2 開発するプログラム全体図

高校の魅力発信プログラム		高・専一貫プログラム						動物業界定着プログラム
	中学	高校1年	高校2年	高校3年	高専接続	専門学校1年	専門学校2・3年	社会人
対象		農業高校（生物資源科、熱帯資源科等）				動物専門学校（トータルペットケア、動物看護、トリミング、動物飼育コース）		
人数		60名	60名	60名		12名	12名	
プログラム概要	農業・動物関連高校の魅力伝える	アニマルプロフェッショナルに触れることで、10年後の自分の将来の姿を具体化し、意欲的に学習に取り組む姿勢を身につける	各種理論を学び、基礎的な実践をすることで飼養に慣れ、成功体験を重ね自己肯定感と自信を醸成	<b>目指す資格</b> 愛玩動物飼養管理士試験2級（通常、専門学校1年で目指す資格） <b>実技・実習</b> 沖縄の野生動物の現状や愛玩動物をめぐる社会環境を学び、課題発見と解決を共同作業により図る		愛玩動物飼養管理士試験1級（通常、専門学校2年で目指す資格） 地域社会との連携を図り、地域社会に貢献できるフィールドワークメンバーとして参画	DINGO高度資格、JKC高度資格、国家資格愛玩動物看護師（卒業後に目指す資格） 地域社会に貢献するフィールドワークのリーダーとして、企画、実践、後輩を指導する	高・専一貫プログラムを終了した卒業生が業界定着し、さらなる高度資格取得を目指す
学習内容	動物に触れあう・職業理解	畜産飼育の基礎知識・企業見学会・業界人講和	飼養管理・飼養実習・校外実習・業界人講和	資格取得対策（愛玩動物飼養管理士2級）・総合飼養管理・総合飼養実習・課題発見解決実習		資格取得対策（愛玩動物飼養管理士1級）・企業実務実習・フィールドワーク	高度資格取得対策（DINGO/JKC）・飼養研究・企業実務実習・フィールドワーク	コミュニケーション・セルフケア・高度資格取得
育成能力	進学意欲・学習意欲	将来像明確化・学習意欲	学習意欲・自己肯定感・自己効力感	専門知識・課題発見能力・課題解決能力・コミュニケーション力		専門知識・コミュニケーション力・共感力・協調性	高度な専門知識・リーダーシップ・企画力・後輩指導力	より高度な専門知識・現場力

高専接続方法 高・専一貫プログラムを受講している高校生と受講していない高校生に学力差が出ないための取組み実施（次頁に詳細記載）

図 4-3 プログラム全体図

### 4.3 高専連携接続の課題と解決方法

高・専一貫プログラムを高校から受講している者と受講していない者で学習時期にズレが生じるが、資格取得対策の通信化、段階的に人材育成できるフィールドワークプログラムの開発により、受講・未受講での接続課題を解決、学習者全員を地域の中核人材へと育成していく。

高・専一貫プログラム		高校3年	専門学校1年	専門学校2・3年	社会人
目指す資格	未受講		愛玩動物飼養管理士試験2級	愛玩動物飼養管理士試験1級、DINGO資格、JKC資格、国家資格愛玩動物看護師	DINGO高度資格、JKC高度資格、国家資格愛玩動物看護師
	受講	愛玩動物飼養管理士試験2級（通常、専門学校1年で目指す資格）	愛玩動物飼養管理士試験1級（通常、専門学校2年で目指す資格）	DINGO高度資格、JKC高度資格、国家資格愛玩動物看護師（卒業後に目指す資格）	通常の対面授業より先行学習しているため、この部分を通信化することで高専接続の課題を解決
実技・実習	未受講		沖縄の野生動物の現状や愛玩動物をめぐる社会環境を学び、課題発見と解決を共同作業により図る	地域社会との連携を図り、地域社会に貢献できるフィールドワークメンバーとして参画	地域社会に貢献するフィールドワークのリーダーとして、企画、実践、後輩を指導する
	受講	沖縄の野生動物の現状や愛玩動物をめぐる社会環境を学び、課題発見と解決を共同作業により図る	地域社会との連携を図り、地域社会に貢献できるフィールドワークメンバーとして参画	地域社会に貢献するフィールドワークのリーダーとして、企画、実践、後輩を指導する	地域社会に貢献するフィールドワークのアドバイザーとして参画

高・専一貫プログラムを高校から受講している者と受講していない者で学習時期のズレはあるが、高校生、専門学校生、社会人が同テーマのフィールドワークを実施し、フィールドワークのメンバー・リーダー・アドバイザーと段階的に人材育成できるプログラムにすることで高専接続および専企接続の課題を解決

図 4-4 高専連携接続の課題と解決方法図

## 5 各年度の取り組み

### 5.1 令和3年度

#### 1. ヒアリング調査

高校教師、専門学校教員、企業、高校生、専門学校生 等

#### 2. 視察調査

先行事例視察調査

#### 3. プログラム開発協議会開催

目的明確化、スケジュール確認

開発カリキュラム課題整理

開発カリキュラム方向性決定

#### 4. コーディネーター業務

高等学校、行政、企業の橋渡し

全体調整、進捗管理、体制構築

連携校、連携企業の開拓

### 5.2 令和4年度

#### 1. カリキュラム開発

高校向けカリキュラム

#### 2. 教材開発

高校生向け教材、シラバス、コマシラバス開発

#### 3. 実証授業の開催

授業実施、アンケート集計、検証評価

※受講対象者：高校生

#### 4. プログラム開発協議会開催

開発カリキュラム課題整理

高専接続方法検討

#### 5. コーディネーター業務

高等学校、行政、企業の橋渡し

全体調整、進捗管理、体制構築

連携校、連携企業の開拓

### 5.3 令和5年度

1. カリキュラム開発
  - 高校生向けカリキュラム
  - 専門学校向けカリキュラム
2. 教材開発
  - 高校生向け・専門学校生向け教材、シラバス、コマシラバス開発
3. 実証授業の開催
  - 授業実施、アンケート集計、検証評価
  - ※受講対象者：高校生、専門学校生
4. プログラム開発協議会開催
  - 開発カリキュラム課題整理
  - 社会人向けカリキュラム検討
  - 高校の魅力発信（中学校向け）方法検討
5. コーディネーター業務
  - 全体調整、進捗管理、体制構築
  - 連携校、連携企業の開拓

### 5.4 令和6年度

1. カリキュラム開発
  - 高校生向け通信教材
  - 専門学校生向けカリキュラム
  - 社会人向けカリキュラム
2. 教材開発
  - 教材、シラバス、コマシラバス開発
3. 実証授業の開催
  - 授業実施、アンケート集計、検証評価
  - ※受講対象者：高校生、専門学校生、社会人
4. プログラム開発協議会開催
  - 開発カリキュラム課題整理
  - 就職への連結方法検討

5. コーディネーター業務

- 全体調整、進捗管理、体制構築
- 連携校、連携企業の開拓
- プログラム受講の高校生への学費減免検討

5.5 令和7年度

1. カリキュラム開発

- 専門学校向けカリキュラム
- 社会人向けカリキュラム

2. 教材開発（通学・通信）

- 教材、シラバス、コマシラバス開発

3. 実証授業の開催

- 授業実施、アンケート集計、検証評価
- ※受講対象者：専門学校生、社会人、中学生

4. プログラム開発協議会開催

- 開発カリキュラム課題整理

5. コーディネーター業務

- 連携校、連携企業の開拓
- プログラム受講の高校生への学費減免検討

5.6 令和8年度

1. 成果普及のための取組み

- 他校での実証授業開催
- 採用高校、採用専門学校の拡大

2. 教材開発

- 教材、シラバス、コマシラバス開発

3. 実証授業の開催

- 授業実施、アンケート集計、検証評価
- ※受講対象者：社会人、中学生

4. 実証踏まえて教育効果検証

- 開発カリキュラム検証
- 開発教材、シラバス、コマシラバス検証
- 実証授業教育効果検証

## 5. 事業最終報告

事業最終報告書作成

普及のための Web サイト、冊子制作

## 6. プログラム開発協議会開催

開発カリキュラム課題整理

## 7. コーディネーター業務

連携校、連携企業の開拓

プログラム受講の高校生への学費減免検討

## 5.7 カリキュラム開発スケジュール

年度	高校生向け	専門学校生向け	社会人向け	中学生向け
R3 年度				
R4 年度	カリキュラム開発			
R5 年度	↓	カリキュラム開発		
R6 年度	カリキュラム完成	↓	カリキュラム開発	
R7 年度		カリキュラム完成	↓	カリキュラム開発
R8 年度			カリキュラム完成	カリキュラム完成

表 5-1 カリキュラム開発スケジュール

## 5.8 実証授業スケジュール

年度	高校生向け	専門学校生向け	社会人向け	中学生向け
R3 年度				
R4 年度	県内連携高校			
R5 年度	県内高校（動物系）	県内専門学校		
R6 年度	県外高校（動物系）	県内専門学校	定着支援プログラム	
R7 年度		県外専門学校	定着支援プログラム	中学生向けキャリア教育支援
R8 年度			定着支援プログラム	中学生向けキャリア教育支援授業

表 5-2 実証授業スケジュール

## 6 事業実施に伴うアウトプット（成果物）

年度	成果物
令和3年度	1. ヒアリング・視察調査分析報告書 2. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画
令和4年度	1. 開発プログラム（高校3年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画
令和5年度	1. 開発プログラム（高校1、2年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画
令和6年度	1. 開発プログラム（専門学校1年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画
令和7年度	1. 開発プログラム（専門学校2、3年向け） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業報告書、Web サイトでの報告、事業 PR 動画
令和8年度	1. 開発プログラム（全体） 2. 教材、シラバス、コマシラバス 3. 評価基準及び評価シート 4. 事業最終報告書、Web サイトでの報告 5. 事業 PR 動画 6. 普及に向けた冊子制作

表 6-1 事業実施に伴うアウトプット

## 7 目指すべき指標（令和8年度・最終年度目標）

項目	目標数	目標達成に向けた方策
連携プログラム導入高校数	3校	コーディネーターが連携校の開拓を 通年実施し、導入高校、導入高校生 を増やしていく。また、高校と企業 の仲介役となり、企業見学や実習等 を積極的にコーディネートしてい く。
連携プログラム受講高校生数	60名 (各学年20名ずつ)	
連携プログラム受講の 高校生の中退者数	0人	高校生へのキャリア教育を実施し、 将来像を明確化する。中学生にも同 様に高校の魅力発信プログラムによ り、キャリア教育を実施し、将来像 を明確化する。
連携プログラム受講の高校生 の当該分野への進学率	20%以上 ※注1	
専門学校（当学園）中退者数	0人	資格取得対策の通信化により効率的 に学習できる環境を整える。
専門学校生 愛玩動物飼養管理 士1級 資格取得率	80%以上 ※注2	
専門学校生の当該分野への 就職率	95%以上	離職原因の1位は「人間関係」のた め、職場でのコミュニケーションや セルフケア法を動物業界定着プログ ラムで実施。
卒業生の離職率	30%以下	

※注1…当該分野の大学、専門学校等への進学合わせて20%以上

※注2…2018～2020年度 平均取得率75.8%

表7-1 目指すべき指標

## 8 本事業終了後の成果の活用方針・手法

### ◆成果普及の方向性

開発プログラム（カリキュラム、教材等）及び「高校」「行政」「企業」「専門学校」の4者が有機的に連携することにより構築したネットワークの構築法や連携法を普及するには右図のように「タテ展開」と「ヨコ展開」を同時に進めていくことが重要である。

#### 【タテ展開】

##### ●全国の観光分野専門学校に開発プログラム・導入ノウハウ普及

沖縄県専修学校各種学校連合会や全国専門学校教育研究会等通じて、成果報告し、開発プログラムや導入ノウハウを普及していく。

##### ●地域社会に事業周知・認知度向上

社会ニーズに即して開発したプログラムであることを地域社会に周知し、プログラムの認知度を向上していく。プログラム内で実施するフィールドワークは地域住民にも学んでいただける内容となっており、生涯教育の一環として、地域社会に提供していく。

#### 【ヨコ展開】

##### ●「導入高校」及び「連携企業」を増やす

事業終了後もコーディネーターが高校及び企業を訪問し、導入高校、連携企業を増やしていく。また、観光以外の分野で高専連携ができないか検討していく。

### ◆成果普及方法

1. カリキュラムを改訂しながら、授業継続
2. 授業実施状況を SNS 等で情報発信
3. 開発プログラム、導入事例の Web 公開
4. 普及活動のための冊子を制作

観光分野専門学校、地域社会、県内高校、県内企業に配付

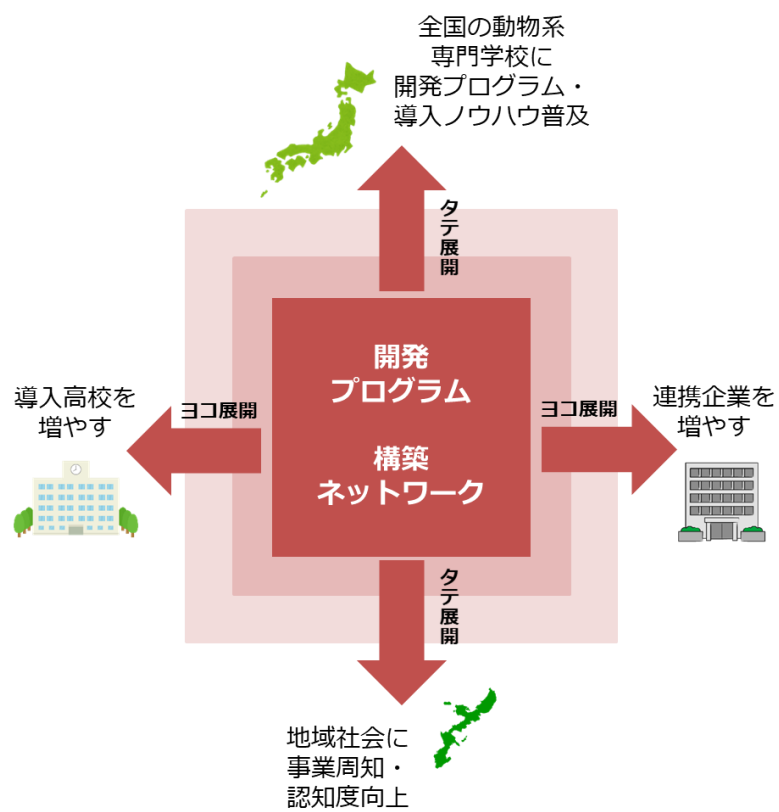


図 8-1 本事業終了後の成果の活用方針・手法

## 第2部 令和3年度の活動

### 1 令和3年度スケジュール

時期	連携プログラム開発協議会	ヒアリング・視察調査	プログラム開発	コーディネーター業務
9月				委員依頼・委員就任
10月		ヒアリング・視察調査先の選定	プログラム素案作成 ↓	高校・行政・企業への周知、連携プログラム開発協議会運営
11月	第1回開催	ヒアリング調査	↓	連携校、連携企業の開拓 ↓
12月		視察調査	↓	
1月		調査分析、報告書作成	課題・ニーズ整理	↓
2月	第2回開催		開発内容選定	連携プログラム開発協議会運営
3月			プレ開発	事業報告書作成

表 1-1 令和3年度スケジュール

#### ◆開発に向けた学内及び協力機関間での調整に関する見込み

##### プログラム開発のための協議会開催

プログラム開発に向け、高校・専門学校・教育行政・企業が横断的に連携するプログラム開発協議会を発足。

各機関より委員を選定し、現場の抱える課題や、解決に向けての方法を検討。

開催回数：令和3年度…年2回 令和4年度～8年度…年3回

##### コーディネータープロフィール

本事業のコーディネーターとして社会保険労務士の前里久誌氏を配置。

県内を中心とした労務管理業務を通して、中小企業の抱える課題に日々向き合っており、本事業を通して地域の中核人材の育成に関する事業へ取り組むにはうってつけの方である。又、長年専門学校の学校評価委員をお勤めになっており、学校教育への提言及び外部委員としての第三者的視点からの提案にも力を発揮して頂くことが期待される。

## 2 連携プログラム開発協議会

## 2.1 連携プログラム開発協議会の設置

目的・役割	<p>高等学校、行政、専門学校、企業の四者による高専連携プログラム開発に向けた協議会を発足、プログラム開発に向けた委員会を開催する。ヒアリング調査の分析、課題及びニーズ整理、開発内容の選定を行う。また、開発プログラムの課題整理、導入に向けた手順を整理する。</p>		
検討の 具体的内容	<p>令和3年度</p> <p>目的明確化、スケジュール確認 調査分析、課題及びニーズ整理 目指す人材像の明確化 開発カリキュラム内容整理 開発カリキュラム方向性決定</p> <p>令和4～8年度</p> <p>開発カリキュラム作成 開発カリキュラム課題整理 開発カリキュラム導入手順整理 開発カリキュラム検証 開発教材、シラバス、コマシラバス検証 実証授業教育効果検証 プログラム受講の高校生への学費減免検討 全国普及に向けた課題整理 全国普及に向けた取組み検討</p>		
委員数	10人	開催頻度	<p>令和3年度：年2回 令和4～8年度：年3回</p>

表 2-1 連携プログラム開発協議会

## 2.2 連携プログラム開発協議会の構成員（委員）

氏名		所属・職名	役割等	都道府県名
1	渡真利 学	沖縄県立中部農林高等学校 教諭	委員	沖縄県
2	山城 篤	沖縄県教育庁県立学校教育課 産業教育班 班長	委員	沖縄県
3	吉川 鉄平	学校法人シモソノ学園 国際動物専門学校・ 大宮国際動物専門学校 募集広報部 部長	委員	東京都
4	金城 高治	有限会社 ペットクラブオーシャン 代表取締役	委員	沖縄県
5	喜納 保	ペットメディカルセンター・エイル 取締役	委員	沖縄県
6	翁長 朝	公益財団法人 沖縄こどもの国 動物みらい課 課長	委員	沖縄県
7	吉田 剛	学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド 専門学校 副校長	委員長	沖縄県
8	仲松 謙	学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド 専門学校 事務局長	委員	沖縄県
9	與那原 美奈子	学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド 専門学校 教務課長	委員	沖縄県
10	崎山 孝司	学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド 専門学校 就職課 主任	委員	沖縄県
11	伊禮 嘉本	学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室	事務局	沖縄県

表 2-2 連携プログラム開発協議会委員

### 3 事業を進めるにあたっての調査

#### 3.1 高専連携プログラム開発のためのヒアリング調査概要

調査目的	各教育機関、産業界、教育行政の現状と課題を明らかにし、ニーズを満たし、課題を解決するためのプログラム開発を行う。
調査対象	①高等学校②専門学校③企業④県教育委員会⑤高校生⑥専門学校生
調査手法	面接（個別・集団）調査法
調査項目	<p>①高等学校教師 （入口）中学校連携教育の課題 （中身）学科の教育ニーズ・課題 （出口）職業教育の課題</p> <p>②専門学校教員 （入口）高専連結の課題 （中身）学科の教育ニーズ・課題 （出口）地域産業連結の課題</p> <p>③企業 （入口）人材確保のニーズ・課題 （中身）社内教育ニーズ・課題</p> <p>④県教育委員会 「中高専大教育連携」のニーズと課題</p> <p>⑤高校生 高校進学学科決定要因・中学職業教育調査・学科科目・実習のニーズ 職業意識調査・進学決定要因調査</p> <p>⑥専門学校生 専門学校進学決定要因・高校職業教育調査・学科科目のニーズ・満足度調査 職業意識調査</p>
分析内容	調査項目の分析のみならず、潜在的ニーズや課題の考察を行う。
開発するプログラムにどのように反映するか（活用手法）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校カリキュラム 生徒と高校ニーズに沿ったと高校1～3年連結カリキュラムの作成。中高職業教育連結カリキュラムの作成。</li> <li>・専門学校カリキュラム 企業ニーズに沿った専企連結カリキュラムの作成。</li> </ul>

表 3-1 事業を進めるにあたっての調査

## 3.2 高大連携プログラム先行事例視察調査

調査目的	連携プログラムを進めるにあたっての課題と実現に有効な手続き・手法等、プログラムの実現障壁を軽減、取り除くことを目的とする。
調査対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京都立町田工業高校</li> <li>・日本工学院</li> <li>・東京都教育庁</li> </ul>
調査手法	面接調査法
調査項目	連携プログラムを進めるにあたる課題と実現に有効な手続きや手法を調査
分析内容 (集計項目)	連携プログラムを進めるにあたっての課題有効な手続き・手法等
開発するプログラム にどのように反映する か(活用手法)	連携プログラム検討委員会、カリキュラム・プログラム開発に反映する。

表 3-2 高大連携プログラム先行事例調査

## 4 本事業の方向性協議

第一回プログラム検討委員会を開催し、本事業概要と事業内容の協議を行った。

- 女性の場合離職の理由が「結婚・出産」が多い。これらの理由で離職した人たちを世間（業界）がどのように復帰しやすくするかを先の議論になるがこの場で意見を交換したい。
- 連携という点で、我々の地域でも小中学生の体験学習が行われており、全国的に見直されている。当初の目的は「地域」で子どもたちがどう学び、育っていくかであった。
- 当社も参加して 10 年ほどになる。体験した子どもたちにアンケートを実施しているが 10%程度しか業界に戻らない厳しい状況。体験に来た子どもたちが、どのくらいの割合で動物業界に就職したかという現状は非常に興味がある。
- 一番大切なのは親（従業員）で、子どもの進路に大きな影響を与えていると思う。業界や組合で平均すると 65 歳以上となる親（世代）をどのように支えていくかを検討している。我々の業界でも法制度の改正等で経営が行き詰っている企業が増えてきたように感じる。知識や情報などを共有していく必要がある。我々も行政に意見を述べていく必要がある。
- 正しい情報、知識を伝えることができれば、もっと動物業界へ進む生徒は増えると思う。今回のプログラムを見ると「動物業界のベーシックプログラム」という文言がある。卒業生がどのくらい動物業界に就職しているかを把握していないが、まずは動物業界を就職先として希望する割合を増やすことが課題だと思うので、生徒たちにたくさんの情報を与えたい。
- インターンシップは 3 日間という決まりがあるが学校によって独自に改革、学科によって変えているケースもある。実施していない学校もあり、将来を見据えた制度の一体化ができていない。
- インターンシップは令和 4 年度より、今まで通りの全県一致の実施から「総合的な探求」の時間として取り入れてはという意見が普通高校からある。但し専門高校は必修としている。

・就労体験だけではなく事前学習による動機付けを行わないと、ただ「やるだけ」になってしまう。(企業や専門学校から)外部講師を派遣してもらっているが、まだこれからという状況。

・今後は、インターンシップ先の業界の課題、就職が決まっている業界から、生徒に課題を出してもらい、事前に考えさせることを取り入れることで有意義なインターンシップにさせていきたいと考えている。

・今後は高校1年時から「職業講話」などを増やし、キャリア教育を早期化していく意見もある。専門高校の生徒が卒業後、すぐに就職できるよう繋げていきたい。

## 議題2 令和3年度実施取り組み説明

・この事業で課題としている点が高校生の進学率や休・退学率、専門学校の社会的役割、地域で活躍する人材の育成。課題となっているのが「企業が魅力的ではない」という点。これは身の引き締まる思いがある。

・当社としてできることの1つとして、職業を体験するという現状のインターンシップ内容ではなく、学校や生徒が求める内容に改善すること。

・子どもが「すごい」と感じる働く姿を見せる要素が必要。業界のプロが学生たちに見せることができる環境が1番の動機につながる。この経験で「やる」と決めれば、頭でなく心で決めたことなので離職も減ると思う。

・当社では出産、子育てに対し働き方を変えていった。例えば子どもが学校を休んだ時、職場の休憩室でパソコンや勉強を行っている。職員が休むのではなく、子どもと一緒に出勤できる環境をつくっている。

・当社で重要なのは、オペの時間(13時から16時)。子どもの迎えなどがある職員に対しては17時退社できるよう配慮し、新人では対応できない時間帯で集中的に働けるようにしている。他の企業でも同様に改善が進めば離職率は減ると思う。

・生徒たちにとって一番大事なことは「大人と接する」ことである。(生徒たちが知る動物業界の)情報が少ないことがネックであり、生徒たちには多くの体験させることが必要。

・一番大事なことは学校と産業界の連携であり、学校内だけでキャリア教育は成立しない。

・今、課題となっている離職率、出産や子育てによる休職など、このプログラムで子どもたちが学ぶことで一度現場を離れても、技術を維持することができると思うので未来へ繋げることができるはずである。

・中部農林高校のペット関係学科で「県内唯一」という点は強みでもあるが、1つしかないということは弱い部分でもある。ここで確実に成果を出し、その他の農林高校の畜産系学科に波及させたい。

・動物業界はイメージが先行している印象を受けている。ギャップを埋めなければ退学、離職を減らすことはできないし、希望者を増やすこともできない。この点は非常に難しい。

・業界を知ってもらおう。憧れる姿を見せることが大切。これらと並行して、命に係わる、精神的にハードであるなど動物業界の厳しい点も伝えないといけない。それでも「やる」という子を育てないといけない。そのようなプログラムをつくる必要がある。

## 5 ヒアリング調査結果

下表の通り、ヒアリング調査を行った。

2021年12月24日10:00~11:00	東京都教育庁	訪問
2021年12月24日13:00~14:00	東京都立町田工業高等学校	訪問
2022年1月12日16:00~17:00	沖縄県立中部農林高等学校	web
2022年1月29日11:00~11:40	観光系大学	web

表 5-1 ヒアリング調査

### 5.1 観光系大学ヒアリング

#### 1. 高大連携の取り組みについて（全学）

##### ○連携に取り組まれた経緯

高大連携の取組みは、直接的には中教審の答申（中教審第177号）で、中等教育から中等教育への連携や高大接続という教育に一貫性が求められていることへの対応するものである。

##### ○連携の初期段階

関係性の強い付属高校から高大連携をスタートさせた。現在複数の付属高校があり、付属高校からは推薦ということですとやってきた。高大連携により、進路のミスマッチの回避や高校から大学に必要な基礎学力（たとえば英語力の向上）や教育の質の向上をしている。

##### ○連携の深化

高校から進学のための「大学グローバルコース」を作り、高校の授業に大学の講義を取り入れ、学部で必要な英語力の習得など高校1年から大学に入ってくるための勉強をしている。

#### 2. 高大連携の取り組みについて（学部）

##### ○学部独自の活動

現在、鹿児島県、山形県、鳥取県、岡山県の高校との連携を行っている。

##### ○大学設置コースの学生と高校生の教育の場

大学には授業とインターンシップとで「学び」を融合させたコースがある。新型コロナウイルスの影響でインターンシップができなかったため、コースの学生と高校生が連携して取組み、その取組みを競うという教育実験を行った。出前講座的な1回での講義で終わるのではなく、オンラインを活用しながら継続的にコミュニケーションを取りながら課題解決に向かう実習を行った。

○高校の科目で最も多いのは総合学習の時間だと思う。

### 3. 高大連携を実現するために解決された課題

学部独自で行っている高大連携改革は、中教審の答申にある「真の連携」にまでは至っていない。そのため、今後、全学的取り組みのシステムー教育連携指定校制度などを導入するなどの改善が必要と感じている。

また、高大連携は大学の教員の負荷が大きいのも課題の一つである。

さらに、連携を行う上で避けては通れない問題がいわゆる「学力」問題。今後起こり得る学力のミスマッチをどう解決していくか、どう高校教育に食い込んでいけるかが課題になる。

### 4. 高大連携のビジョン

まず、連携の「量」だが、先ほども述べたとおり高大連携の教員の業務負荷が大きいため、拡大展開し全国に広めていくのかとなると現状では正直難しい。そのため、プログラムのパッケージ化を行い効率的な展開を目指している。

次に、連携の「質」だが、これはプログラムの充実を図っていこうとしている。

現状のプログラムは、高校のニーズに合わせて、大学が変えているという状態。教育効果測定はなかなか難しい。内容は、大学が出したい内容と高校生が受けたい内容に差が出てしまう。この部分も悩ましいところである。

## 5.2 東京都教育庁ヒアリング

### ○コンソーシアム設立の経緯

「工業高校、専門学校、企業等の連携におけるIT人材の育成に向けた検討委員会」  
IT人材不足と、工業高校の人気低迷を回復させることが目的だった。将来的な人材不足の解消に向けて検討したところ、日本IBMより工業高校の3年間と専門学校の2年間の通算5年間のプログラムによりIT人材の育成が可能と提案があった。

IBMなどのIT企業が参加しアメリカで開始したIT人材育成の教育モデル（5年間）として【P-TECH】があり20カ国以上で200校、600社以上が参加してスタートしている。⇒ 町田工業高校にはそれをアレンジした【Tokyo P-TECH】を導入。

### ○コンソーシアムの運営

現在は、教育委員会が主体となり町田工業高校、日本工学院、日本IBMなどの企業複数社で構成するコンソーシアムで運営している。今後は都立の工業高校にて、同様の2つのコンソーシアムを検討しておりマッチングを検討しながら最終的に調整する。

### ○他分野（商業高校、農業高校）への横展開の可能性

文科省事業で検討されている高専連携事業で考えた場合、どのジャンルでも対応できると思う。特に商業高校は情報処理の授業があるので【Tokyo P-TECH】のようなプログラムが展開しやすいのではないかと。農業高校では東京では農家就農などは現実的ではないので、スマートアグリを含めた形であればと可能だと思う。

### ○中学生に対しての広報

中学生への情報発信の方法に関してはまだまだ改善の余地があると思っている。ただ、志望者は増加傾向にある。

### ○学習指導要領の親和性

専門学校と高校との打ち合わせで高校の学習指導要領の範囲で逸脱しないようにしてそこはしっかり線引きをした。高校として基本的なカリキュラムにプラスアルファで完結するようにして就職も可能にする。

○コンソーシアム構築の際、専門学校、企業、行政（東京都）の協定専門学校との協定は結びやすいが、企業は結びにくい場合がある。

○このような事業には、「主体的に取り組む教員」が重要になると思われる。また、この事業を通しての副産物として、生徒が保護者や高校の先生以外の大人と接することによるコミュニケーション能力の向上があげられる。

### 5.3 東京都立町田工業高校ヒアリング

○連携科目はどの領域（科目）の単位になのか

高校1年生は「工業技術基礎」2年生以降は「実習や課題研究」などの授業時間を活用している。どちらもTokyo P-TECH授業は、年間通して数時間授業となっており、全体に占める比率も数%程度である。

○現時点での連携学科生徒の進路希望はどうなっているか

P-TECH受講生約35名中、令和2年度は3名、令和3年度は9名が進学予定。

連携専門学校に進学した卒業生は、別授業を受けているか

別授業を受けてはいない。放課後や週末等を利用し、別途授業を受けている状況である。

○連携する内容の中学校への広報

近隣の中学校へ年間1～2回の訪問で説明を実施。夏休み等を利用して自校でも実施。結果として町田工業高校を希望する中学生も増え、特に推薦入試での人気は高まってきている。

○連携する授業の評価方法

Tokyo P-TECHとしての評価はしていない。

○日本IBMと連携した4つの事業（パイロット事業）

- ① IT 講話 1年生（学年全生徒対象） 年4回程度
- ② 授業支援 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象） 高校での授業に企業から講師を派遣してもらう
- ③ メンタリング 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象） 社会人の先輩が、進路や勉強の相談に乗る
- ④ ジョブシャドウイング 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象） 企業でメンターが普段している仕事の様子を見学

○今後の展開

都内2校の工業高校が同様のプログラムを導入する予定で動いている

## 5.4 沖縄県立中部農林高等学校ヒアリング

### ●高連携で取り組む授業時間と科目について

愛玩動物飼養管理士について、2年生は週に3時間、3年生は週に2時間、「動物飼養管理」という授業の中で取り組んでいる。1年生は「生物活用」という授業が週に2時間あり、科目名は違うけれど、1年生、2年生、3年生と段階的にステップアップして取り組むことが可能である。

### ●授業時間数の上限

通常の授業とバランスを取りながらやっていくことは大切と思うが、特別プログラムという形で取っていくことは可能。年間プログラムとして組み込むことも可能。

### ●高校でプログラムとしてやってほしいこと

職業人に来てもらい、話をしてもらおう。インターンシップ前に話をしてもらおう。ということがまず挙げられる。また、愛玩動物飼養管理士に沿った内容で、資格取得へのモチベーションをアップしてほしい。1年生、2年生、3年生のレベルに合わせた講義、資格取得に向けた講義を希望する。

### ●時間数について（プログラムの具体的時間数イメージ）

月に2時間であれば大丈夫。ただし、熱帯資源科の1年生には動物にこだわらず、職業観・社会観を広げてもらいたい。働くことの意義や働くことの大切さ、ひいては農業全体のすばらしさを伝えられるものが望ましい。

### ●インターンシップについて

インターンシップに行く前にこういうことを勉強してほしいというのが企業側にはあるので、事前に学習されたらどうかという内容もある。

### ●高校側で専門学校がお手伝いさせていただくといいということについて

専門学校を通して、企業との連携。社会と繋がっている仕組みが見えてくると、生徒たちの動きがかわってくる。鮮明になってくる。

## 6 ヒアリング調査結果の検討

第2回連携プログラム開発協議会でヒアリング結果について検討した。

- 高校と専門学校との連携、先進事例など12月のヒアリングに同行した職員から報告は受けている。教育課程を逸脱しない形にしないといけないが、専門学校との連携になるので専門高校・普通高校にとってもプラスになる事業展開を目指してほしい。
- 渡真利委員から生徒のキャリア形成分野に対しテキストが少ないという報告があった。動画などによる研修を予定していたが、コロナ禍により延期。現在、配信をはじめたところ。この点も踏まえて情報の共有をし、各学校へ落とし込んでいきたいと考えている。
- 教育課程上におけるキャリア教育の位置づけ、生徒にどうキャリアの意識を持たせるかなど80分程度の長さ。
- 2月後半に2回目の配信予定。本来は夏休みに配信する予定であった。(全5回予定)

## 7 令和4年度開発プログラム方針の検討

第2回連携プログラム開発協議会でヒアリング結果について検討した。

・中部農林高校へのヒアリング報告が非常に興味深かった。高校からのオファーも具体的な形で多岐にわたっている。どの部分を事業として取り上げ、中心的に扱うかを仕分けするかが、実施の具体化に向けた分け目になると思った。

・渡真利委員から報告のあったプログラムを通した具体的な目標3点。①動物関連産業の実態、可能性を感じる。②働くことの意義、責任感を養う。③社会の一員として尊厳、自己肯定感を高める。という取り組みの中で、②と③に関しては社会全体が抱えているような課題にもなるのではないかと思う。

・高校の先生方がいろいろな取り組みをしている中、進路ガイダンス、職業教育、職業理解ガイダンスなどで「なぜ働くのか」「動物に関わる仕事をするのか」など魅力と実態を踏まえて話してほしいと言われる。専門学校はそこに学生募集、進学といったエッセンスを入れて話をせざるを得ない。普通の授業での取り扱い、山城委員より報告のあった動画、テキストの作成といった部分と分けるか、一緒に考えていくのか、授業コマ数の配分など、教育課程に組み入れることが難しいので放課後の講座として実施するのか。となった時、①～③のどの部分を主体にしていくのかなど。例えば動物愛玩資格だと①と繋げていくといったビジョンがわかりやすく、具体化できると思う。

・②③に関しては重たい印象を受ける。高校側でも「やってはいるが、やっている感じ」が出ずにそのまま進学させてしまっている印象が一番残っており、専門学校側も実際に働いてみないと感じにくいという課題がある。この点は少し分けて考えていかないと、話も大きくなってしまおうのではという印象を今日の内容とレポートから受けた。

・ヒアリングレポートのなかに「コミュニケーション能力が上がった」「業界へのハードルが下がった」「面接での影響があった」という点がすごく印象的だった。東京の事例は高大であるが、高専もいい流れができるのではと感じた。

・人が大事という話があった。担当する窓口の「人」であると思うが、それ以外にも高校、専門学校、就職先などやはり「人」だよなという感銘を受けた。

・外部との連携という点で、学生が自分でイベントを企画することを行っているので一緒に出来ればと思う。

・動物愛玩の資格でいうと、今年度からスタートした動物看護の基礎を学ぶ授業が始まった。先に高校でふれていれば本来は2年生で取得する資格が1年生でとれるものもあるのでスムーズに進めるのではないかと思う。

・社会全体の取り組みと課題という点ではキャリア教育の一環として南風原小学校からオファーがあり、トリマーの職業講話を行った。小6から人気のある業界として第4位に入っていた。小学生から業界の話を聞きたいという声は意外と多いことを知った。小学生からでも業界の話

を聞ける場を作ってもよいかと思った。

- ・就職の担当者として、人間性教育の難しさを感じている。企業の求める人材と学校が教育できる人材の乖離を動物業界は抱えていると思う。学校で企業の方に説明会を行ってもらった際、求めている人材像が全く違っていたこともある。人間性教育に関わるところが非常に大きい。

- ・例えば資格は持っていないが気遣いができる子などプログラムを通じて企業の意見、高校、専門学校との連携をとることが非常に大事だと思った。

- ・自身が学んでできことを発揮する、お金を稼ぐ、自分のやりがいを求めることなど働くことの意義について個人の差も散見できるのではないかな。広いので定義が難しいとも感じる。

- ・専門学校で動物の専門的な知識以外にも、職業の仕事に対する大切さ、喜び、モチベーションを上げることが教えていることは企業側としてもうれしい。けれどやはり子どもたちの企業への理解力ではないだろうか。親の希望もあるが、せっかく専門学校を卒業しても、その道へ進めないということはどうかとも思う。

- ・高校生もアニマルプロフェッショナルに触れ、将来像を明確にする。専門知識を持った高校生が専門学校でさらに知識をつけて職場で活かすというプロジェクトはすごく良い取り組みだと思う。その中でも本当に何を目指し、ペット業界として共に子どもたちと成長する企業を目指している。トレーニング、訓練士も同じく、この業界で生活ができるのか、企業と専門学校がどこまで連携できるのかといった点も密に詰めていきたい。

- ・企業も学ぶことが多いと思う。働きやすい職場づくり支援、どのような支援と一緒にできるかなどを考えていかないといけないと思う。専門学校・企業がお互いに相談しあえる体制は素晴らしいことだと思う。

- ・まだペット産業は法人化された組織が少ない。多くが個人経営である点も踏まえ、行政も一緒になりこのような取り組みができれば一番素晴らしい。我々企業側もできるだけ専門学校と密に連携を持ち学生の育成に力を注ぎ、ペット産業に進んでよかったと思う体制づくりをしたいのでどのような形で進めるかを明確にしてやっていきたい。

- ・仕事に対する定義は人それぞれの意見があるので非常に答えにくいと思った。実際に働くうえではお金の話が出てくる。シビアにとられるかもしれないが、前職や希望の給与など個人的にはちゃんと話してくれたほうがわかりやすい。今回は希望の手取額などはっきり言った人を採用した。

- ・実際にお金の話があることも理解させないといけないが、教育の中に入っていないし、その話をするのが悪いことと思ったりしてしまう。そうではなく、実際に自分が生活していくために必要な額があり、正社員でないといけないという親御さんの理由もわかる。そこに到達するための教育はあったのかといった情報を提供しなければいけない。

- ・動物看護師になる、トレーナーになるといった夢・目標を持って進めるストーリーがきちんと伝えられれば業界で長く続けていける人材になれると感じている。この点が入っていないのが個人的に寂しい。技術、学習といった他の部分ではスキルの高い子がどんどん出る。しかし本質的な部分にズバッとちゃんと入れる子があまりいない。その部分をどう伝え、教えるべきなのか

は自身もよくわからないが、教育者からの発信、または別の角度からがいいのかとも感じている。

・現状として、こどもの国が高校や沖縄ペットワールド専門学校との関わりとして、実習等で学生に来てもらうなどしている。内容については飼育係に付いて1日仕事を体験してもらうという流れで、生の仕事を体験してもらう意味では良い。しかしこれが本当に高校や専門学校のニーズに合っているか、体験する本人が求めている内容になっているかといった議論はそこまでなかった。実習なので任せてもらっていた点もあるが、今回はお互いが実施している内容について意見交換をしテリトリーを超えたよいプログラムを作れると理解している。今後も連携を取りながら学生たちにより良いプログラムが構築していければと思う。

・正社員の話としては、こどもの国でも求人はどうしても契約社員からの募集というのが現状。昇給やベースアップの仕組みはあるが、正社員と契約社員では入社時の心構え、モチベーションは変わってくると思うのでここは私たちが今、努力すべきところだと思う。今回はいろいろなことを考えさせられる時間だった。

資 料

事業所名	ヒアリング内容の特定を防止する観点から不掲載
事業所住所	
調査日時	2021年11月29日 11:00~11:40
調査方法	Web
インタビュー	学部 教務課勤務
インタビュアー	学校法人KBC学園 仲宗根、(株)穴吹カレッジサービス 広原
記録	(株)穴吹カレッジサービス 中村
進行	事前にインタビューシートを送付し、頂いた回答(※資料参照)を基に仲宗根が進行。
事業所概要	日本で初めて観光学を専門とした履修体制を整え、以降、我が国の観光学をリードし続けている大学である。また、特に観光分野における高大連携実績も高い
内容	<p>1.高大連携の取り組みについて(全学)</p> <p>○連携に取り組まれた経緯</p> <p>高大連携の取組みは、直接的には中教審の答申(中教審第177号)で、中等教育から中等教育への連携や高大接続という教育に一貫性が求められることへの対応するものである。</p> <p>○連携の初期段階</p> <p>関係性の強い付属高校から高大連携をスタートさせた。現在複数の付属高校があり、付属高校からは推薦ということですとやってきた。高大連携により、進路のミスマッチの回避や高校から大学に必要な基礎学力(たとえば英語力の向上)や教育の質の向上をしている。</p> <p>○連携の深化</p> <p>付属高校の連携がある程度形になると、入試改革として付属校以外の高校との連携をスタート。具体的には高校から進学のための「大学グローバルコース」を作った。このコースは大学進学専門コース。2017年度の募集から40名(1クラス)でスタートし、今は80名(2クラス)になっている。高校の授業に大学の講義を取り入れ、学部で必要な英語力の習得など高校1年から大学に入ってくるための勉強をしている。</p> <p>2.高大連携の取り組みについて(学部)</p> <p>○学部独自の活動</p> <p>現在、鹿児島県、山形県、鳥取県、岡山県の高校との連携を行っている。観光系や国際系など実業系コースがある高校とは連携が組みやすい。</p> <p>○大学設置コースの学生と高校生の教育の場</p> <p>大学には授業とインターンシップとで「学び」を融合させたコースがある。</p>

新型コロナウイルスの影響でインターンシップができなかったため、コースの学生と高校生が連携して取り組み、その取り組みを競うという教育実験を行った。連携には「大学生と高校生」、「大学教員と高校生」の連携がある。大学教員と高校生の連携はよくあると思うが、大学生と高校生の連携はあまり見られない。高校の先生も一部入ってもらい、連携していった。出前講座的な1回での講義で終わるのではなく、オンラインを活用しながら継続的にコミュニケーションを取りながら課題解決に向かう実習を行った。

【仲宗根質問】

プログラムを受けている高校生が高校のどの科目で受けているのか。

【回答】

高校ごとに異なるが、最も多いのは総合学習の時間だと思う。我々も総合学習としてプランを組んでいる。

### 3. 高大連携を実現するために解決された課題

全学的に取り組んでいる高大連携改革は順調に進み、大学ビジョンに沿った教育活動ができています。一方、学部独自で行っている高大連携改革は、一定以上の授業評価は見られるものの先の中教審の答申にある「真の連携」にまでは至っていない。そのため、今後、全学的取り組みのシステムー教育連携指定校制度などを導入するなどの改善が必要である。

また、高大連携は大学の教員の負荷が大きいのも課題の一つである。今後、大学経営の視点からもこの点は看過できない大きな課題となるだろう。

連携を行う上で避けては通れない問題がいわゆる「学力」問題。今後起こり得る学力のミスマッチをどう解決していくか、どう高校教育に食い込んでいけるかが課題になる。

### 4. 高大連携のビジョン

まず、連携の「量」だが、先ほども述べたとおり高大連携の教員の業務負荷が大きいので、拡大展開し全国に広めていくのかとなると現状では正直難しい。そのため、プログラムのパッケージ化を行い効率的な展開を目指している。

次に、連携の「質」だが、これはプログラムの充実を図っていかようとしている。現状は受注生産的なプログラムを提供しているため、提案型のプログラム開発を行っていく必要も感じている。また、今後、高校のニーズ（対象科目・時間数・単位数・連携に対する温度（期待）感など）を把握しより充実した教育プログラムにしていきたい。

現状では、総合学習でも毎週1時間。そのうち何回大学側の授業に割けるか、それは高校で個別になり、パッケージでの高大接続は難しい。連携している高校に目を向けると、すでにカリキュラムに組み込まれているので連携

<p>の縮小も難しい。</p> <p>【広原質問】 特に知りたい高校のニーズは何か</p> <p>【回答】 総合学習でやっているとは思いますが、我々が高校のカリキュラムを熟知しているわけではない。高校でどういう位置づけになっているか、また進路指導に役立っているのかなどを知りたい。我々も高校のニーズの聞き取りをしているが、本音が出てきにくい。</p> <p>【広原質問】 高大連携の教育の目標と評価について</p> <p>【回答】 大学の教員側は高校の先生と相談してテーマを決めていくので、大学の教員は専門外でも対応している。高校側の何を学んでどういう学習効果につなげるかに大学教員が詳しくないので、高校のニーズに合わせて、大学が変えているという状態。</p> <p>教育効果測定に関しては講義アンケート等をとっているが、高校生の書いてくるアンケートがどれほど参考になるかは疑問である。そのため、この問題はなかなか悩ましいところである。</p> <p>【広原質問】 パッケージのラインナップを知りたい</p> <p>【回答】 今は学部には 2 コースだが、以前は複数のコースがあった。ホスピタリティ系、エアライン系、ツーリズム、観光政策、そして、働きながら学ぶコース。それぞれが 1 つずつパッケージを持っているが、高校の現場で使えるのは全部ではない。エアライン系だと「CA になりたい」で入ってくるが、実際は CA だけを育成するのではなく、航空政策なども入ってくる。大学が出したい内容と高校生が受けたい内容に差が出てしまう。この部分も悩ましいところである。</p>
--

2021 年度「専修学校による地域産業中核の人材養成事業」 「沖縄観光系・動物系分野における有機的連携プログラム」 ヒアリング調査 レポート	
日 時	2021 年 12 月 24 日（金）10:00～11:00
場 所	東京都教育庁 東京都新宿区西新宿 2-8-1 （東京都庁第 2 本庁舎 15 階北側）
参加者	<p>【東京都教育庁 都立学校教育部高等学校教育課】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多田 緑様（課長代理）</li> </ul> <p>【沖縄県教育庁 県立学校教育課】 2 名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金城 盛秀様（産業教育班指導主事）</li> <li>・平良 みどり様（指導主事）</li> </ul> <p>【日経教育グループ 専門学校事業部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長濱 克実様（事業部長）</li> </ul> <p>【学校法人智晴学園 専門学校琉球リハビリテーション学院】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・福田 聡史様（教務管理部長代理）</li> </ul> <p>【学校法人 KBC 学園】 2 名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仲宗根 真</li> <li>・伊禮 嘉本</li> </ul>
内 容	<p>東京都教育庁 都立学校教育部高等学校教育課 課長代理 多田 緑 様より          「工業高校、専門学校、企業等の連携における IT 人材の育成に向けた検討委員会」          設置の主な目的は 2030 年に約 79 万人の IT 人材が不足するとの推計による。</p> <p>併せて、工業高校の人気低迷を回復させることも目的の一つである。</p> <p>将来的な人材不足の解消に向けて検討したところ、日本 IBM より工業高校の 3 年間と専門学校の 2 年間の通算 5 年間のプログラムにより IT 人材の育成が可能と提案があった。</p> <p>※ IBM などの IT 企業が参加しアメリカで開始した IT 人材育成の教育モデル（5 年間）として【P-TECH】があり 20 カ国以上で 200 校、600 社以上が参加してスタートしている。⇒ 町田工業高校にはそれをアレンジした【Tokyo P-TECH】を導入。</p> <p>Q. コンソーシアムはどのように予定しているのか？</p> <p>A. 現在は、教育委員会が主体となり町田工業高校、日本工学院、日本 IBM などの企業複数社で構成するコンソーシアムで運営している。今後は都立の工業高校にて、同様の 2 つのコンソーシアムを検討しておりマッ</p>

	<p>チングを検討しながら最終的に調整する。神奈川県その他、茨城県でも【P-TECH】が検討されており、茨城県では信用金庫を核として地元のIT企業に依頼をするような形式で連携支援を行う予定と聞いている。</p> <p>Q. 【Tokyo P-TECH】は工業高校の生徒募集課題の解消、日本IBMの人材確保など利点が多いが、今後は他分野（商業高校、農業高校）への横展開はいかがでしょうか？</p> <p>A. 文科省事業で検討されている高専連携事業で考えた場合、どのジャンルでも対応できると思う。特に商業高校は情報処理の授業があるので【Tokyo P-TECH】のようなプログラムが展開しやすいのではないかと。農業高校では東京では農家就農などは現実的ではないので、スマートアグリを含めた形であればと可能だと思う。</p> <p>Q. 【Tokyo P-TECH】は工業高校生にとって素晴らしいプログラムですが、中学生に対して高校進学又は将来の仕事としてのキャリア教育的な将来像をどのように伝えていらっしゃいますか？（高校の生徒募集に関連）</p> <p>A. 【Tokyo P-TECH】の中学生への告知はかなり難しい課題であり、現在も解決に向け模索中です。工業高校への進学希望者確保については、中学生の人口が減少の一途をたどっていること、更に町田工業高校は神奈川県に近いが都立高校であるがゆえ都民しか入学できないなどの特殊な要因もあり苦戦しているのが現状。</p> <p>中学生への情報発信の方法に関してはまだまだ改善の余地があると思っている。</p> <p>Q. 【Tokyo P-TECH】と学習指導要領の親和性はいかがでしょうか？（就職も視野に）</p> <p>A. 専門学校と高校との打ち合わせで高校の学習指導要領の範囲で逸脱しないようにしてそこはしっかり線引きをした。高校として基本的なカリキュラムにプラスアルファで完結するようにして就職も可能にする。</p> <p>【Tokyo P-TECH】を選択した生徒へは専門学校への入学を誘導はできないが、ワンランクアップ（IT企業への即戦力としての就職）したい場合などには、専門学校への入学を検討してもらうようなイメージである。</p> <p>Q. コンソーシアム構築の際、専門学校、企業、行政（東京都）の協定はどうなっていますか？</p>
--	--

A. 専門学校との協定は結びやすいが、企業によっては正式な文書（押印）に抵抗があって結びにくい場合がある。その際には「入会届」や「その取組みに参加します」といった簡易な方法を選択できる方法も考えている。取組みを広く知って頂くためには、出来ればプレスを利用して公表したほうが良いと考え、なるべく正式な枠組みが謳える方がよいと思う。

【その他】

この事業でも人、モノ、金が大事になるが、今後導入する学校が増えた場合には、最終的に「主体的に取組む人」が重要になると思われる。町田工業高校の寺島 和彦先生は 15 年間町田工業高校で取組んでいる。

この事業を通しての副産物として、生徒が保護者や高校の先生以外の大人と接することによるコミュニケーション能力の向上があげられる。

高校生にとって、情報がないことで不安に思っていた業界への就職などについては、実際に現場で働く方と接することにより心理的なハードルは下がったように感じる。

今後実際に就職面接などを受けるときには、有利に働くのではないか。

2021 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」 「沖縄観光系・動物系分野における有機的連携プログラム」 ヒアリング調査 レポート	
日 時	2021 年 12 月 23 日 (木) 13:00~14:00
場 所	東京都町田市忠生 1-20-2 東京都立町田工業高校
参加者	<p>【東京都立 町田工業高校】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寺島 和彦様 (総合情報科長 主幹教諭)</li> </ul> <p>【沖縄県教育庁 県立学校教育課】 2 名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金城 盛秀様 (産業教育班指導主事)</li> <li>・平良 みどり様 (指導主事)</li> </ul> <p>【日経教育グループ 専門学校事業部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長濱 克実様 (事業部長)</li> </ul> <p>【学校法人智晴学園 専門学校琉球リハビリテーション学院】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・福田 聡史様 (教務管理部長代理)</li> </ul> <p>【学校法人 KBC 学園】 2 名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仲宗根 真</li> <li>・伊禮 嘉本</li> </ul>
内 容	<p>Q1. 連携科目は、令和4年度からの新指導要領の枠組みではどの領域(科目)の単位互換になるのか。</p> <p>A1. 高校1年生は「工業技術基礎」2年生以降は「実習や課題研究」などの授業時間を活用している。どちらも Tokyo P-TECH 授業は、年間通して数時間授業となっており、全体に占める比率も数%程度である。</p> <p>Q2. 現時点での連携学科生徒の進路希望はどうなっているか</p> <p>A2. Tokyo P-TECH 導入前よりは進学率が高まり、特に連携する専門学校(日本工学院)への進学者が増加している(Tokyo P-TECH 受講生約35名中、令和2年度は3名が進学、令和3年度は9名が進学予定)</p> <p>(補足)</p> <p>入学時は総合情報科(1学年定員175名)として括り募集のため、厳密には Tokyo P-TECH を受講する生徒は、2年生以降に情報テクノロジー系列を選択した者のみとなる。Tokyo P-TECH 受講人数について、現3年生までは1クラス分約35名であるが、系列の改編によって現2年生からは2クラス分約70名が受講している。</p> <p>(関連質問)</p> <p>Q2-1. 連携する専門学校に進学した卒業生は、他の高校出身者とは別の授業を受けているのか</p>

	<p>A2-1. 人数的な関係もあり別授業を受けてはいない。放課後や週末等を利用し、別途授業を受けている状況である。</p> <p>Q3. 連携する内容の中学校への広報はどのようになっているか（学校説明会・中学校訪問等）</p> <p>A3. 近隣の中学校へ年間1～2回の訪問で説明を実施。夏休み等を利用して自校でも実施（年間5回程度実施）学校説明会には保護者も含めて各回60～100名が参加する。最近ではTokyo P-TECHを強く推している事もあり、興味を示してくれる中学生も増加傾向にある。結果として町田工業高校を希望する中学生も増え、特に推薦入試での人気は高まってきている。</p> <p>Q4. 連携する授業の評価方法はどのようにされているのか</p> <p>A4. 通常の高校の授業としての評価のみであり、Tokyo P-TECHとしての評価はしていない。</p> <p>Q5. 「単位認定」と「検定試験」について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・検定試験合格と単位認定の関係（不合格の場合など）</li> <li>・検定試験対策の時間をどのように確保しているのか。</li> </ul> <p>A5. Tokyo P-TECHとしての試験や単位認定はしていない。</p> <p>その他のヒアリング内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本IBMと連携した4つの事業（パイロット事業）</li> </ul> <p>IT 講話 1年生（学年全生徒対象） 年4回程度</p> <p>授業支援 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象）高校での授業に企業から講師を派遣してもらう</p> <p>メンタリング 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象）社会人の先輩が、進路や勉強の相談に乗る</p> <p>ジョブシャドウイング 2年生以上（Tokyo P-TECH受講生約70名が対象）企業でメンターが普段している仕事の様子を見学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の展開</li> </ul> <p>都内2校の工業高校が同様のプログラムを導入する予定で動いている</p>
--	--

<p>2021 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」 「沖縄観光系・動物系分野における有機的連携プログラム」 ヒアリング調査 レポート</p>	
日 時	2022 年 1 月 12 日（水）16:00～17:00
場 所	オンライン
参加者	<p>沖縄県立中部農林高等学校 熱帯資源科 渡真利 学 先生          学校法人 KBC 学園 学園本部 地域創生室 仲宗根 真          株式会社穴吹カレッジサービス 広原 敬幸          株式会社穴吹カレッジサービス 中村 多恵</p>
内 容	<p>●高専連携で取り組む授業時間と科目について          （渡真利先生）          愛玩動物飼養管理士について、2 年生は週に3時間、3 年生は週に2時間、「動物飼養管理」という授業の中で取り組んでいる。1 年生は「生物活用」という授業が週に2時間あり、科目名は違うけれど、1 年生、2 年生、3 年生と段階的にステップアップして取り組むことが可能である。</p> <p>●授業時間数の上限          通常の授業とバランスを取りながらやっていくことは大切と思うが、特別プログラムという形で取っていくことは可能。年間プログラムとして組み込むことも可能。</p> <p>（仲宗根）          高専連携は文科省の学習指導要領に入っているものではないので、こうでなければならないというものではないが、最大限できるものはどういふものであるかを検討したい。</p> <p>なお、12 月に東京の町田工業高校にヒアリングし、町田工業高校は日本 IBM と連携している。そこで出た話としては、特別プログラムは年間通して全体の5%くらいがギリギリのラインとおっしゃっていた。我々もそれをベースで考えている。</p> <p>●高校でプログラムとしてやってほしいこと          （渡真利先生）          職業人に来てもらい、話をしてもらおう。インターンシップ前に話をしてもらおう。ということがまず挙げられる。</p> <p>また、愛玩動物飼養管理士は2 年生が2 級を、3 年生では、2 級合格者は1 級を目指している。3 年生は1 級と2 級を目指す人が混在している。合格率のアップを目指したいが、内容的に濃いところがあり、高校の</p>

先生では追いつかない状況がある。高専連携でやってもらう授業では愛玩動物飼養管理士に沿った内容で、資格取得へのモチベーションをアップしてほしい。1年生、2年生、3年生のレベルに合わせた講義、資格取得に向けた講義を希望する。

なお、1年生はまだ専門コースに分かれていないので、授業の中でやっているのは動物の飼養、清掃や餌についてなどふれあいの内容。1年生は動物について幅広く、2年生、3年生はコースに分かれているので深い内容をお願いしたい。

●愛玩動物飼養管理士の難しさについて（愛玩動物飼養管理士について、テキストの内容が専門的で難しいということであるが、ある特定の専門領域について教え方が難しいということか）

教科書に書いていることをイメージしながら話すことはできるが、文字だけではなく、実際の様子が伝えられ、学生がイメージしやすいものになると非常にありがたいと思う。

●時間数について（プログラムの具体的時間数イメージ）

（広原）

1学期に2、3時間を担当させていただくことになった場合、1学期（約3カ月）の間に2時間だけとなると連続性というものではなく、単発の講義になる。例えば1カ月に1回、3カ月だと3回は時間数として高専連携授業に充てていただくことは可能か。

（渡真利先生）

月に2時間であれば大丈夫。

（広原）

単発ではなく、1つの流れとして作ってやっていきたい。今後、月1回のパターンや月3回のパターンであればどういう授業内容となるかをご提示させていただきたい。

●1年生の授業内容について

（渡真利先生）

熱帯資源科1年生は専門コース（栽培と動物）には分かれておらず、40名と一緒に学んでいる。動物のことを知り、動物コースに多く進むのは本望だが、40名が全員動物と言うと学科のバランスが崩れ問題が生じる。

1年生には動物にこだわらず、職業観・社会観を広げてもらいたい。働くことの意義や働くことの大切さ、ひいては農業全体のすばらしさを伝えられるものが望ましい。

（仲宗根）

1年生はコース選択をしていないため、動物の専門的なことより職業や仕

	<p>事をする大切さ、仕事の喜び、働くことへのモチベーションをあげること を目標に。そして、勉強を頑張ろうというスイッチが入ることを期待した ものにしたい。</p> <p>●インターンシップについて (渡真利先生)</p> <p>中部農林高校ではインターンシップは2年生で設定している。2年生で 動物や農業を選んだ生徒がインターンに行っている。</p> <p>昨年度、今年度はコロナでインターンシップに行くことができなかった。 これを機に新たなインターンシップの路線が作れるのではと思っている。 インターンシップ先の企業紹介はぜひお願いしたいところ。インターンシ ップに行く前にこういうことを勉強してほしいというのが企業側にはあ るので、事前に学習されたらどうかという内容もある。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>専門学校もインターンシップをやっており、受け入れ先から求める人物像 のヒアリングし、それを反映させた事前研修を行っている。職業教育を行 っている専門学校の得意分野でもあるのでぜひお手伝いさせていただき たい。</p> <p>動物は通常のサービス業等とは違って、特殊な仕事でもあるので、動物分 野の動機づけが必要。動機づけを行うことは動物飼養管理士にも触れてく ることになる。衛生面を事前に勉強しないといけないので、それは動物飼 養管理士試験にもつながる。</p> <p>●キャリア教育について(高校のキャリア教育で使われている教科書、副 読本について) (渡真利先生)</p> <p>キャリア教育のテキストというものはない。生物活用の教科書、グリーン ライフ(グリーンツーリズム)の教科書を使っており、これがキャリア教 育に繋がっているかどうかかわからない。</p> <p>(広原)</p> <p>キャリア教育のテキストを学校に合わせて作ってほしいと思っている。</p> <p>●動物飼養管理士のテキストの出版名 (渡真利先生)</p> <p>日本愛玩動物協会が発行しているテキストを使用。副読本はなし。</p> <p>●高校側で専門学校がお手伝いさせていただくというについて (渡真利先生)</p> <p>高校側だけでできないことは企業とのタイアップなど外部とのつながり</p>
--	---

	<p>の構築。専門学校に入学してからやっていくのがふさわしいことかもしれないが、外部の方、企業とのつながりができるような企画があればいい。専門学校を通して、企業との連携。社会と繋がっている仕組みが見えてくると、生徒たちの動きがかわってくる。鮮明になってくる。</p> <p>●中部農林高校の現段階で地域や企業と接点を持つ取組み (渡真利先生)</p> <p>各学科単発であるが、「民間活力導入事業」の取り組みで、地域で活躍する個人や企業の方を学校へ招き、年に1～2回講義を開いてもらう取り組みがある。</p> <p>食品科学科などが、企業と連携した商品を開発しコンビニで販売する取り組みを持つなど外部とのつながりが取れる企画を実施している。熱帯資源科は捨て犬や猫を減らす目的で、「保護犬保護猫撲滅作戦」をペットショップや介護施設また近隣の学校でPR活動を展開している。今後外部とのつながりを強くしていきたい希望がある。</p> <p>地域や企業と生徒が接点を持つ取組みを高校側として望んでいる。 (仲宗根)</p> <p>例えば、地域づくりという観点から企業とのタイアップ企画などのノウハウを専門学校は持っている。何かしらのお手伝いができる。</p> <p>●最後に (仲宗根)</p> <p>専門学校は、デザインやコンピュータなどの専門教育を行っている。動物分野に限らず、高校現場にとっていいもの、高校にとって助かることをこの取り組みの中でやっていければと思っている。反対にフィットしていない場合はストレートに言っていただき本当によい連携にしていきたい。今後も定期的に情報交換できれば幸いである。</p> <p>●(追記)高専連携プログラムの中部農林高校としての目標 (渡真利先生)</p> <p>本校として本プログラムを通して、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①動物関連産業の実態・可能性を感じる</li> <li>②働くことの意義・責任感を養う</li> <li>③社会の一員としての尊厳・自己肯定感を高める</li> </ol> <p>以上の目標を掲げている。</p>
--	--

## 議事録

文部科学省事業 令和3年度「専修学校による地域産業中核人材養成事業」 第1回 プログラム検討委員会 議事録	
開催日時	2021年11月11日(木) 15:00~17:00
会場並びに 開催方法	沖縄ペットワールド専門学校
出席者	<p>(プログラム検討委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄県教育庁 県立学校教育課 産業教育班 班長 山城 篤 (代理参加) 沖縄県教育庁 県立学校教育課 指導主事 伊波 貴文</li> <li>・沖縄県立中部農林高等学校 教諭 渡真利 学</li> <li>・学校法人シモソノ学園 国際動物専門学校・大宮国際動物専門学校 募集広報部 部長 吉川 鉄平</li> <li>・学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド専門学校 副校長 吉田 剛</li> <li>・学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド専門学校 教務課長 與那原 美奈子</li> <li>・有限会社 ペットクラブオーシャン 代表取締役 金城 高治</li> <li>・ペットメディカルセンター・エイル 取締役 喜納 保</li> <li>・公益財団法人 沖縄こどもの国 動物みらい課 翁長 朝 (事務スタッフ)</li> <li>・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室アドバイザー 仲宗根 真 伊禮 嘉本</li> <li>・学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド専門学校 仲松 謙 (教材説明)</li> <li>・株式会社穴吹カレッジサービス教育事業部 岡山営業所 主任 広原 敬幸 (議事録作成)</li> <li>・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室 東 知範</li> </ul>
議題	<p>議 事</p> <p>議題1 令和3年度事業計画説明</p> <p>議題2 令和3年度実施取り組み説明</p>
配布資料	<p>配布資料</p> <p>資料① 令和3年度事業計画書</p> <p>資料② プログラム検討委員名簿</p>
会議概要	伊禮よりスケジュール、配布資料の確認後、吉田が挨拶。各委員より自己紹介を賜る。議題1で仲宗根より事業計画、内容について、広原より制作教材の内容を説明。説明後、各委員より質問・意見。休憩後、議題2に移り、

	仲宗根より今年度の取り組みを説明。各委員より質問・意見を承る。最後に伊禮より今後の予定を説明し、吉田の挨拶にて終了。
	<p>議題1：令和3年度事業計画説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料①を仲宗根が説明</li> </ul> <p>意見、質問等</p> <p>(吉川委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(資料①) P5の「動物業界定着プログラム」についても目的の1つに入っていると聞いている。私たちが大きく、1番難しい課題であるにとらえている。</li> <li>・自校には約900名の学生が在籍。7割が女性、3割が男性。性別は関係ないが実際は離職の理由に関連があるのではないのではととらえている。この点を明確にしておかないと議論の方向性が変わってしまうと思う。御校(沖縄Pet)の現状を教えてください。</li> </ul> <p>(吉田委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・8割女性、2割が男性。</li> </ul> <p>(仲宗根)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学科によっても若干変わる。</li> </ul> <p>(吉田委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護系やトリミング系は女性の割合が高い。逆にしつけは低いと感じる。飼育系は半々となり、トータルすると8割が女性。</li> </ul> <p>(吉川委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年度にもよるが、本校も同様な学科なのでほぼ同じ。トリミング系の業界は男性を求める傾向があるが、要望に対応できていない状況がある。</li> <li>・女性の場合離職の理由が「結婚・出産」が多い。これらの理由で離職した人たちを世間(業界)がどのように復帰しやすくするかを先の議論になるがこの場で意見を交換したい。</li> </ul> <p>(仲宗根)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・我々も卒業生の状況を通じて、ある程度は把握できていると感じる。しかし「学校として何ができるか」という点がジレンマとなっている。そこで止まらず、結婚・出産で一定期間離職した人たちがどのような不安を抱え、復職のネックになっているのかを把握し、この点が「職業訓練」で解消できるものであれば、教育機関である学校がその役割を担うことは十分可能であると思う。ただ「考えている」という対応でなく、具体的に何をするかをこのプログラム内で示していきたい。</li> </ul> <p>(金城委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連携という点で、我々の地域でも小中学生の体験学習が行われており、全</li> </ul>

	<p>国的に見直されている。当初の目的は「地域」で子どもたちがどう学び、育っていくかであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当社も参加して 10 年ほどになる。体験した子どもたちにアンケートを実施しているが 10%程度しか業界に戻らない厳しい状況。体験に来た子どもたちが、どのくらいの割合で動物業界に就職したかという現状は非常に興味がある。</li> <li>・（吉川氏が質問した）動物分野で学び卒業し、動物業界に就職したパーセンテージは気になる。</li> <li>・一番大切なのは親（従業員）で、子どもの進路に大きな影響を与えていると思う。業界や組合で平均すると 65 歳以上となる親（世代）をどのように支えていくかを検討している。</li> </ul> <p>我々の業界でも法制度の改正等で経営が行き詰っている企業が増えてきたように感じる。知識や情報などを共有していく必要がある。我々も行政に意見を述べていく必要がある。</p> <p>（吉田委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄 Pet は毎年 95%程度動物業界に就職するが、数%は分野外の企業に就職している。また途中で（動物業界での就職）をあきらめて退学するケースもある。</li> </ul> <p>（與那原委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護系の学生は県外へ就職することも多い。県外企業からも沖縄出身の就職者は素直さが評価されている。</li> <li>・看護系の学生はほぼ病院などに就職。トリミング系の生徒は 8 割、2 割はショップスタッフなど。入学時から希望している業種に就職する学生が多い。県外の専門学校教員からも 100%近く就職希望が入学時と変わらない状況は珍しいという声が多い。</li> <li>・学校と企業との連携が取れていると感じる。</li> </ul> <p>（渡真利委員）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本学の学科では 40 名中 20 名が動物系のコース。学科全体で 10 名程度が動物関係に進学、就職している。</li> <li>・志が高く、県内ペットショップ、県内外の動物系専門学校、トリミングスクールなどに進んでいる。</li> <li>・他業界分野への進学、就職者は動物関連の業種は、（将来的に）生活ができないのではという憶測を抱いており、断念している様子が見える。</li> <li>・正しい情報、知識を伝えることができれば、もっと動物業界へ進む生徒は増えると思う。今回のプログラムを見ると「動物業界のベーシックプログラム」という文言がある。卒業生がどのくらい動物業界に就職しているかを把</li> </ul>
--	---

	<p>握していないが、まずは動物業界を就職先として希望する割合を増やすことが課題だと思うので、生徒たちにたくさんの情報を与えたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・40名中10名程度という現状は本校でも課題。もっと伸ばせるのではと期待している。</li> </ul> <p>(伊波代理)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生のインターンシップの状況としては昨年、今年度はコロナ禍の影響で全県一致の実施はできていない。授業として独自で行っている学校はある。</li> <li>・インターンシップは3日間という決まりがあるが学校によって独自に改革、学科によって変えているケースもある。実施していない学校もあり、将来を見据えた制度の一体化ができていない。</li> <li>・インターンシップは令和4年度より、今まで通りの全県一致の実施から「総合的な探求」の時間として取り入れてはという意見が普通高校からある。但し専門高校は必修としている。</li> <li>・就労体験だけではなく事前学習による動機付けを行わないと、ただ「やるだけ」になってしまう。(企業や専門学校から)外部講師を派遣してもらっているが、まだこれからという状況。</li> <li>・今後は、インターンシップ先の業界の課題、就職が決まっている業界から、生徒に課題を出してもらい、事前に考えさせることを取り入れることで有意義なインターンシップにさせていきたいと考えている。</li> <li>・今年度はインターンシップを中止した。夏休みに「高度人材育成」としておよそ90名を30の事業所に派遣する予定だったが、コロナ禍で50名となった。</li> <li>・参加した生徒の参加目的が明確だったので、これまでの違いを感じた。事前に課題として上がっていた点を解決していくプログラムであったので最後のプレゼン発表は手ごたえを感じた。</li> <li>・このようなインターンシップのあり方を専門高校内に伝えていきたい。</li> <li>・今後は高校1年時から「職業講話」などを増やし、キャリア教育を早期化していく意見もある。専門高校の生徒が卒業後、すぐに就職できるよう繋げていきたい。</li> </ul> <p>議題2 令和3年度実施取り組み説明</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料①を使い仲宗根が今後の取り組み、広原氏がプログラム内容を説明。</li> </ul> <p>意見、感想等 (翁長委員)</p>
--	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この事業で課題としている点が高校生の進学率や休・退学率、専門学校の社会的役割、地域で活躍する人材の育成。課題となっているのが「企業が魅力的ではない」という点。これは身の引き締まる思いがある。</li> <li>・当社としてできることの1つとして、職業を体験するという現状のインターンシップ内容ではなく、学校や生徒が求める内容に改善すること。</li> <li>・また、動物業界離職者へのアプローチ。復職することのできる環境づくりなど。これらは長期的に行う必要があると思う。</li> </ul> <p>(金城委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・企業として、動物関連の学校を卒業した生徒たちが働ける環境を作るためにどうしたらよいかを考えている。企業側が従業員に対し、バックアップがある、将来があるといえることを目指したい。</li> </ul> <p>(喜納委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身も働いて14年になるが、初めは収入や労働時間、働き方の現状に驚いた。</li> <li>・現在は労働時間の短縮、休暇の取得、給与のアップとつなげることができた。</li> <li>・職員も10年経験者も多く、アットホームな環境。人として不平や不満があったら相談できる環境を企業がつくらないといけない。頭ではなく、心で人は仕事を選ぶと思う。</li> <li>・子どもが「すごい」と感じる働く姿を見せる要素が必要。業界のプロが学生たちに見せることができる環境が1番の動機につながる。この経験で「やる」と決めれば、頭でなく心で決めたことなので離職も減ると思う。</li> <li>・当社では出産、子育てに対し働き方を変えていった。例えば子どもが学校を休んだ時、職場の休憩室でパソコンや勉強を行っている。職員が休むのではなく、子どもと一緒に出勤できる環境をつくっている。</li> <li>・当社で重要なのは、オベの時間(13時から16時)。子どもの迎えなどがある職員に対しては17時退社できるよう配慮し、新人では対応できない時間帯で集中的に働けるようにしている。他の企業でも同様に改善が進めば離職率は減ると思う。</li> </ul> <p>(伊波委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・喜納氏の取り組みはすぐに中部農林高校の生徒たちにも聞いてもらいたい内容。</li> <li>・生徒たちにとって一番大事なことは「大人と接する」ことである。(生徒たちが知る動物業界の)情報が少ないことがネックであり、生徒たちには多くの体験をさせることが必要。</li> <li>・一番大事なことは学校と産業界の連携であり、学校内だけでキャリア教育</li> </ul>
--	---

	<p>は成立しない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄県は貧困率、離職率が高く、課題である。解決のために力を貸してほしい。</li> </ul> <p>(渡真利委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(資料①) P22の「目指すべき指標」の最終年度目標を見ると、専門学校生の愛玩動物飼育管理士1級資格取得率80%以上は、必ず達成すると思う。目標を掲げたことで、私たち教員が連携プログラムを実践しているので、確実に結果につながる。そして動物分野で就職する子も確実に増えると思う。</li> <li>・今、課題となっている離職率、出産や子育てによる休職など、このプログラムで子どもたちが学ぶことで一度現場を離れても、技術を維持することができると思うので未来へ繋げることができるはずである。</li> <li>・またこの流れを中学生に伝えることができれば、早い時期から社会に目を向ける事を養うことができ、確実に(中学と高校の)繋がりが強くなる。</li> <li>・中部農林高校のペット関係学科で「県内唯一」という点は強みでもあるが、1つしかないということは弱い部分でもある。ここで確実に成果を出し、その他の農林高校の畜産系学科に波及させたい。</li> </ul> <p>(吉川委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄と東京の専門学校も課題となっている根の部分は変わらないと感じた。</li> <li>・動物関係企業の働く環境が改善していている点を聞いて安心した。</li> <li>・このような事業を行うにあたり、企業の求める人材を把握、即戦力となり継続的に活躍していく人材なのかという情報を引き出し、中高生に伝えないといけないと感じた。</li> <li>・動物業界への就職率が高いことを聞き、沖縄県の子たちはポテンシャルが高いと感じた。</li> <li>・他業界に進学、就職する学生たちがどうすれば動物業界に進むか、考えることが重要。</li> <li>・動物業界はイメージが先行している印象を受けている。ギャップを埋めなければ退学、離職を減らすことはできないし、希望者を増やすこともできない。この点は非常に難しい。</li> <li>・業界を知ってもらおう。憧れる姿を見せることが大切。これらと並行して、命に係わる、精神的にハードであるなど動物業界の厳しい点も伝えないといけない。それでも「やる」という子を育てないといけない。そのようなプログラムをつくる必要がある。</li> <li>・私たち専門学校は、動物業界がどのような人材を求めるのかを把握して高</li> </ul>
--	---

<p>校と連携し、授業を作っていく必要、それを知る機会が必要だと思った。 (與那原委員)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・現在、次年度のカリキュラムを考えているが高校生向けという内容ではまだイメージが湧かない。</li><li>・高校生が「何を学びたいのか」を把握しなければいけないと改めて思った。</li></ul> <p>・今後の予定について (伊禮)</p> <p>令和4年2月10日(木) 15:00~17:00 第2回プログラム検討委員会その他: 本日の参加お礼 (吉田委員)</p> <p>以上 委員会を終了する。</p>
--

文部科学省事業 令和3年度「専修学校による地域産業中核人材養成事業」 第2回 プログラム検討委員会 議事録	
開催日時	2022年2月10日(木) 15:00~17:00
会場並びに 開催方法	ZOOM 利用によるリモート方式にて開催
出席者	<p>(プログラム検討委員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄県教育庁 県立学校教育課 産業教育班 班長 山城 篤</li> <li>・学校法人シモソノ学園 国際動物専門学校・大宮国際動物専門学校 募集広報部 部長 吉川 鉄平</li> <li>・学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド専門学校 副校長 吉田 剛</li> <li>・学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド専門学校 教務課長 與那原 美奈子</li> <li>・学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド専門学校 就職課主任 崎山 孝司</li> <li>・有限会社 ペットクラブオーシャン 代表取締役 金城 高治</li> <li>・ペットメディカルセンター・エイル 取締役 喜納 保</li> <li>・公益財団法人 沖縄こどもの国 動物みらい課 翁長 朝</li> </ul> <p>(事務スタッフ)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室 アドバイザー 仲宗根 真 伊禮 嘉本</li> <li>・学校法人KBC学園 沖縄ペットワールド専門学校 仲松 謙</li> </ul> <p>(オブザーバー)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・株式会社穴吹カレッジサービス 常務取締役 教育事業部 事業部長 伊藤 慎二郎 教育事業部 高松営業所 教育サポート課 課長代 中村 多恵 教育事業部 岡山営業所 主任 広原 敬幸</li> </ul> <p>(議事録作成)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校法人KBC学園 学園本部 地域創生室 東 知範</li> </ul>
議題	<p>議 事</p> <p>議題1 ヒアリング内容報告</p> <p>議題2 プログラム開発のための意見交換</p> <p>議題3 令和4年度活動予定報告</p>
配布資料	<p>配布資料</p> <p>①第2回委員会次第</p> <p>②東京都立町田工業高校ヒアリングレポート</p> <p>③東京都教育庁ヒアリングレポート</p> <p>④中部農林高校ヒアリングレポート</p> <p>⑤事業計画書</p> <p>⑥プログラム検討委員名簿 2021年度</p>

会議概要	伊禮よりスケジュール、配布資料の確認後、吉田が挨拶。伊禮より各委員を紹介し、議題1にて仲宗根よりヒアリング内容を報告。報告後、各委員より質問・意見を承る。休憩後、議題2に移り、プログラム開発のための意見を交換し、各委員より感想を承る。最後に伊禮より今後の予定を説明し、吉田の挨拶にて終了。
内 容	<p>議題1：ヒアリング内容報告</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料②から④についてPPを使い仲宗根が報告 意見、質問等 (山城委員)</li> <li>・高校と専門学校との連携、先進事例など12月のヒアリングに同行した職員から報告は受けている。教育課程を逸脱しない形にしないといけないが、専門学校との連携になるので専門高校・普通高校にとってもプラスになる事業展開を目指してほしい。</li> <li>・渡真利委員から生徒のキャリア形成分野に対しテキストが少ないという報告があった。動画などによる研修を予定していたが、コロナ禍により延期。現在、配信をはじめたところ。この点も踏まえて情報の共有をし、各学校へ落とし込んでいきたいと考えている。 (仲宗根)</li> <li>・県が主導となり制作しているキャリア教育の動画内容は、具体的な職業について働く意義などどのような部分を対象としているのか教えてほしい (山城)</li> <li>・教育課程上におけるキャリア教育の位置づけ、生徒にどうキャリアの意識を持たせるかなど80分程度の長さ。</li> <li>・2月後半に2回目の配信予定。本来は夏休みに配信する予定であった。(全5回予定)</li> </ul> <p>議題2：プログラム開発のための意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料⑤を使い、仲宗根がプログラムの内容、概要、背景等を説明 意見、要望、期待等 (吉川委員)</li> <li>・中部農林高校へのヒアリング報告が非常に興味深かった。高校からのオファーも具体的な形で多岐にわたっている。どの部分を事業として取り上げ、中心的に扱うかを仕分けするかが、実施の具体化に向けた分け目になると思った。</li> <li>・渡真利委員から報告のあったプログラムを通した具体的な目標3点。①動物関連産業の実態、可能性を感じる。②働くことの意義、責任感を養う。③社会の一員として尊厳、自己肯定感を高める。という取り組みの中で、②と③に関しては社会全体が抱えているような課題にもなるのではないかと思う。</li> </ul>

・高校の先生方がいろいろな取り組みをしている中、進路ガイダンス、職業教育、職業理解ガイダンスなどで「なぜ働くのか」「動物に関わる仕事をするのか」など魅力と実態を踏まえて話してほしいと言われる。専門学校はそこに学生募集、進学といったエッセンスを入れて話をせざるを得ない。普通の授業での取り扱い、山城委員より報告のあった動画、テキストの作成といった部分と分けるか、一緒に考えていくのか、授業コマ数の配分など、教育課程に組み入れることが難しいので放課後の講座として実施するのか。となった時、①～③のどの部分を主体にしていくのかなど。例えば動物愛玩資格だと①と繋げていくといったビジョンがわかりやすく、具体化できると思う。

・②③に関しては重たい印象を受ける。高校側でも「やってはいるが、やっている感じ」が出ずにそのまま進学させてしまっている印象が一番残っており、専門学校側も実際に働いてみないと感じにくいという課題がある。この点は少し分けて考えていかないと、話も大きくなってしまおうのではという印象を今日の内容とレポートから受けた。

(吉田委員)

・ヒアリングレポートのなかに「コミュニケーション能力が上がった」「業界へのハードルが下がった」「面接での影響があった」という点がすごく印象的だった。東京の事例は高大であるが、高専もいい流れができるのではと感じた。

・人が大事という話があった。担当する窓口の「人」であると思うが、それ以外にも高校、専門学校、就職先などやはり「人」だよなという感銘を受けた。

(與那原委員)

・外部との連携という点で、学生が自分でイベントを企画することを行っているので一緒に出来ればと思う。

・動物愛玩の資格でいうと、今年度からスタートした動物看護の基礎を学ぶ授業が始まった。先に高校でふれていれば本来は2年生で取得する資格が1年生でとれるものもあるのでスムーズに進めるのではないかと思う。

・社会全体の取り組みと課題という点ではキャリア教育の一環として南風原小学校からオファーがあり、トリマーの職業講話を行った。小6から人気のある業界として第4位に入っていた。小学生から業界の話を聞きたいという声は意外と多いことを知った。小学生からでも業界の話を聞ける場を作ってもよいかと思った。

(崎山委員)

・就職の担当者として、人間性教育の難しさを感じている。企業の求める人材と学校が教育できる人材の乖離を動物業界は抱えていると思う。学校で企業の方に説明会を行ってもらった際、求めている人材像が全く違っていただけもある。人間性教育に関わるところが非常に大きい。

<p>・例えば資格は持っていないが気遣いができる子などプログラムを通じて企業の意見、高校、専門学校の連携をとることが非常に大事だと思った。</p> <p>(仲宗根)</p> <p>・就職を支援する際、働く意義、なぜ働くのかといった動機づけで苦労している点はあるか？</p> <p>(崎山)</p> <p>・非常に苦労するところ。専門学校に入学し動物業界で働くことを夢にしても、保護者が正社員を希望するところ。動物業界はアルバイトからのスタートが多い。やむなく動物業界以外の正社員で就職する子が毎年1～2名いる。</p> <p>・自身が学んできことを発揮する、お金を稼ぐ、自分のやりがいを求めることなど働くことの意義について個人の差も散見できるのではないか。広いので定義が難しいとも感じる。</p> <p>(金城委員)</p> <p>・専門学校で動物の専門的な知識以外にも、職業の仕事に対する大切さ、喜び、モチベーションを上げることがを教えていることは企業側としてもうれしい。けれどやはり子どもたちの企業への理解力ではないだろうか。親の希望もあるが、せっかく専門学校を卒業しても、その道へ進めないということはどうかとも思う。</p> <p>・高校生もアニマルプロフェッショナルに触れ、将来像を明確にする。専門知識を持った高校生が専門学校でさらに知識をつけて職場で活かすというプロジェクトはすごく良い取り組みだと思う。その中でも本当に何を目指し、ペット業界として共に子どもたちと成長する企業を目指している。トレーニング、訓練士も同じく、この業界で生活ができるのか、企業と専門学校がどこまで連携できるのかといった点も密に詰めていきたい。</p> <p>・企業も学ぶことが多いと思う。働きやすい職場づくり支援、どのような支援と一緒にできるかなどを考えていかないといけないと思う。専門学校・企業がお互いに相談しあえる体制は素晴らしいことだと思う。</p> <p>・まだペット産業は法人化された組織が少ない。多くが個人経営である点も踏まえ、行政も一緒になりこのような取り組みができれば一番素晴らしい。我々企業側もできるだけ専門学校と密に連携を持ち学生の育成に力を注ぎ、ペット産業に進んでよかったと思う体制づくりをしたいのでどのような形で進めるかを明確にしてやっていきたい。</p> <p>(喜納委員)</p> <p>・仕事に対する定義は人それぞれの意見があるので非常に答えにくいと思った。実際に働くうえではお金の話が出てくる。シビアにとられるかもしれないが、前職や希望の給与など個人的にはちゃんと話してくれたほうがわかりやすい。今回は希望の手取額などはっきり言った人を採用した。</p>
---

・実際にお金の話があることも理解させないといけないが、教育の中に入っていないし、その話をすることが悪いことと思ったりしてしまう。そうではなく、実際に自分が生活していくために必要な額があり、正社員でないといけないという親御さんの理由もわかる。そこに到達するための教育はあったのかといった情報を提供しなければいけない。

・動物看護師になる、トレーナーになるといった夢・目標を持って進めるストーリーがきちんと伝えられれば業界で長く続けていける人材になれると感じている。この点が入っていないのが個人的に寂しい。技術、学習といった他の部分ではスキルの高い子がどんどん出る。しかし本質的な部分にズバッとちゃんと入れる子があまりいない。その部分をどう伝え、教えるべきなのかは自身もよくわからないが、教育者からの発信、または別の角度からがいいのかとも感じている。

(翁長委員)

・現状として、こどもの国が高校や沖縄ペットワールド専門学校との関わりとして、実習等で学生に来てもらうなどしている。内容については飼育係に付いて1日仕事を体験してもらうという流れで、生の仕事を体験してもらう意味では良い。しかしこれが本当に高校や専門学校のニーズに合っているか、体験する本人が求めている内容になっているかといった議論はそこまでなかった。実習なので任せてもらっていた点もあるが、今回はお互いが実施している内容について意見交換をしテリトリーを超えたよいプログラムを作れると理解している。今後も連携を取りながら学生たちにより良いプログラムが構築していければと思う。

・正社員の話としては、こどもの国でも求人はどうしても契約社員からの募集というのが現状。昇給やベースアップの仕組みはあるが、正社員と契約社員では入社時の心構え、モチベーションは変わってくると思うのでここは私たちが今、努力すべきところだと思う。今回はいろいろなことを考えさせられる時間だった。

(仲宗根)

・ジョブシャドウイングといった点で、動物園だと大型の動物など実習でいきなり世話の体験をすることは危険も伴い難しいと思う。逆に普段通りに見学させてもらえるインターンシップのプログラムはあるか？

(翁長)

・ジョブシャドウイングという形であれば、檻越しでの見学などは実施したことがある。

(広原)

・話を聞いていて、高校側からニーズとして「地域や社会から学ぶ場を提供すること」と「生徒たちが自ら学び考える時間を提供すること」の2点、これら2つによって「生きる力」を身に付けてほしいというがあるのでは感じた。例えば、地域社会から学ぶ場を設けるということから言うと、インターンシップやジョ

	<p>ブシャドウイングが考えられ、自ら学び考える時間を作ることという点では働くことの意義など自分で答えを出していかないといけないもの、教科書には答えが無いものを考えていくといった時間が必要ではないかと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・プログラムに与えられている時間は授業時間だけで考えると月2時間、年間で18時間程度となる。時間の制約内でどのように実現させていくかを一緒に考えていきたい。</li><li>・現在、教育改革が進んでいる。教育のツールが今までとは大きく異なる。1つがITで、もう一方が学びの手法。すでに小学生からアクティブラーニングの導入が行われており、現在の中学1年生くらいでは慣れていると思う。2～3年後には高校に入学するタイミングとなるのでこれらの教育ツールを活用していきながら時間の制約を克服し、専門学校、高校、中学、社会、企業といったつながりがつくれるプログラムができればと考えている。</li></ul> <p>議題3：令和4年度活動予定報告</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・今後の予定について（伊禮）</li></ul> <p>令和4年8月25日（木）15：00～17：00</p> <p>令和4年度 第1回プログラム検討委員会</p> <p>その他：本日の参加お礼（吉田）</p> <p>以上 委員会を終了する。</p>
--	---



令和3年度文部科学省委託

「専修学校による地域産業中核人材養成事業による委託事業」

沖縄・動物系分野における有機的高専連携プログラム開発・実証事業

## 事業報告書

令和4年3月

学校法人KBC学園 専修学校沖縄ペットワールド専門学校

〒900-0034 沖縄県那覇市東町 19-20